

話新覺寐



091214-000-1

特11-391

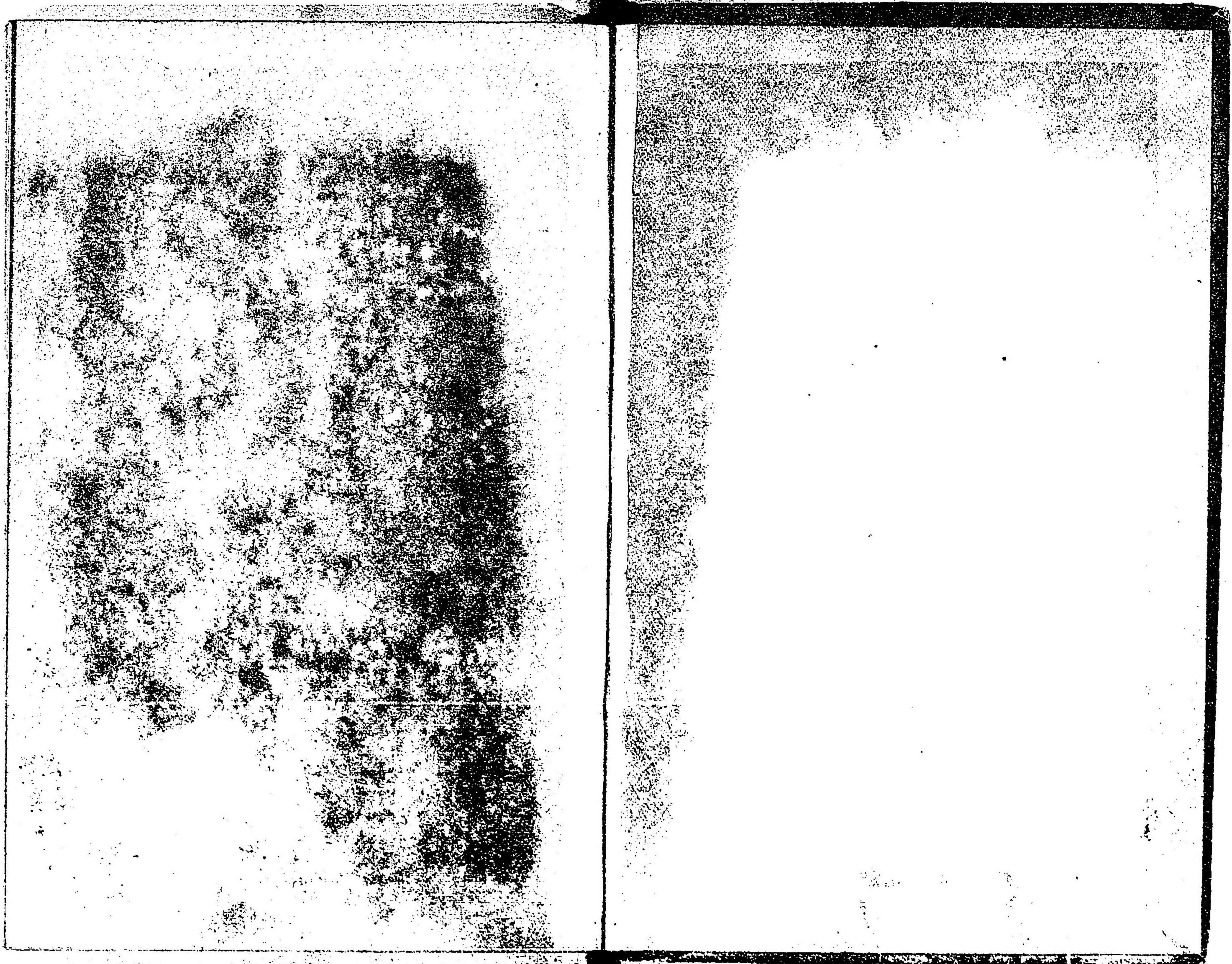
寢覺新話

彩霞園 柳香/著

M18

DBN-2062





荆棘の花壇

第一章

我國未だ文化の域に至らず開明の何たるを識らざるの時方りては諸國は長脇差と稱ふる無賴の徒ありて緯の善惡邪正は拘はらず死するを以て唯其潔よきものとし自ら義學と唱へて客ありと思惟し法網を罹り刑に處せらるるを甘んずる者枚擧するに遑わらざりしが維新以降該野蠻の風を脱するに至りしと雖も無智蒙昧の者にして未だ此慣習を固守し惡弊を日付往々固守を常とし劍戟を弄するを任とあすの輩あまたしわらず茲に明治十六年八月廿九日大坂南船場所にて重懲役十年に處せられたる賭徒信州無宿史科七五郎の事歴を掲げん大坂九條村に住む荆棘の春藏と云へる博徒の乾兒も多人數ある乾益顔あるが或日仲間と俱に同所松島の廓近江屋と云ふ貸座敷へ登樓してお鶴と呼べる娼妓と偶妓みせしふ渠の舊京都島原にて太夫の稼をしたる者ゆる纏致と云ひ取廻しまで他の娼妓より立勝りしお客を博徒の乾益と聞き尙更勤めて鹿零よせず痒い所へ手の届くまで心を盡して款待たれば喜藏も手管に乗せられて夫れより後の毎夜の如く近江屋計へ通ひ来てはビラ切て遊び居たるが同地難波新地に是も博徒の乾益顔ある難波の福が乾兒にて光三郎と云へる小粹を

男の同地にて眠千両と評判したる前々代の嵐崎寛は似たればとて眼光くんと渾名されしが是彼お鶴の情夫筋にて或夜喜藏の揚りし時測らず眼光も来たりしゆる廊下で染々咄てゐたを不圖喜藏が見認め訝しお奴と夫れとのちしほ探つて看るふ眼光と事判つたので吾が買馴染である娼妓を人もあらうと福の乾兒眼光位は自由なされて仲間の者も面が立ぬと俄に近江屋の主個は掛合二百圓にて身購と取極め氣進みのせぬお鶴を無理に九條村へ連れ歸りしが豫て謀し合せしものり其夜お鶴の抜け出して眼光と何處へり逃たる動静を喜藏の聞くより齒齧をふし直ぐ乾兒を手分して兩個が行方と捜させたれども手懸りもあらず歸つて来たぬる喜藏のいよく憤はり万一の時と食客も置し尼ヶ崎浪人の赤松彦四郎より子細を打明け眼光の乾益難波の福方へ談判ふ及ばせしお難波の福の其れと聞くより如何も氣の毒を譯されば早速眼光の行方を尋ねお鶴とやらを渡させうが何分今の今とてゆかねば日數十日の其間待つて賞ひ度と柔順ふ謂はれて看れば彦四郎も否といひ兼ね堅く約して立歸りしうへ此様子を喜藏が話執れ福くら何と返辭が有りませうのら其れまで辛抱を爲てゐるさといと首を長くし待構へて十日が二十日三十日と段々日限の延びてゐれども歴たもの

が潰れたとも挨拶のさいゆる彦四郎の立腹して那れはど男が約して置たよ今日まで何んとも沙汰をせぬとい餘んまり人を馬鹿にした仕打此うへの福も逢つて思ふ存分掛合を詰爲証よよつたら命の取遣り乾益貴郎の顔の立るが設仕損じたら私の骨を仇の手もやア掛けさせず何卒賞つてお呉んかせへと顔色變て駈出ださんとするを喜藏の暫時と押禁め其立腹の道理だ先の名うての難波の福貴公が往つての掛合寸分抜目のあるまいければ尤も素より喧嘩を買んと待ち構へてゐる其中へ放心く往つて若万一其張網へ引つ掛けられたら遺恨を重ねる事も有らうモウ暫く辛抱して返辭の模様を待つたらへ出立て行とも遅くいあるまい急迫すと吾が云ふ事を聞いて吳ると宥められ彦四郎の無念と思へば喜藏が禁むるも只得も腕を摩つて堪へ居たるの明治三年の秋の末まで其後十月の上旬に至り難波の福くら與三郎と云ふ乾兒を使つて云ふ様よの先をろ眼光がお鶴を運て立退いた事よ付ての福乾益も荆棘の乾益へ濟さいとて百般手分をして捜した處稍くの串江州邊に潜んでゐるのを見當つたゆゑお鶴を當家の乾益へ術よく返すやうな仕様と威しつ賤しつ説諭て見たれど死んでも歸るゝ厭だと云つて強てと云へば死な兼ねない思ひ詰たる動靜ですうら無理な生木を裂も

出来ず高の知れたる娼妓一個の然のみ未練もありますまいから眼光も代つて那の女と賞つて来いと乾益うら吩咐られて使ふ来やした潔く遣らうと云ふ返辭を乾益何卒して下せへと勝手自儘を使の辭は爾さだお憤怒は堪ぬ荆棘の毒蕪の夫れと聞くより胸は据兼ね汝は怨みいあけれども眼光の代りも来たと云ふうら定めて覺期爲てゐるだらう觀念せよと云ふより早く傍ある一刀拔手も見せず與三郎の首を打落し小桶の中へ押入れて小脇お抱へ出でんとするを彦四郎が立塞り乾益貴郎の了簡で難波の福お言分をつける積であらうけれど最初お私か遣りかけた絆のもつれの末されば是非とも私を名代よと云へど喜藏の聞き入れず是うら行け火の中へ飛込む様を危うい場所へ乾兒を遣つたと云はれての吾の面が立ちへと強て行かんとする處を尙種々彦四郎が辭を盡して使を求る其赤心を無もされずと漸にして聞き容れたるゆる彦四郎の深く欣び袴の股立ち高くとり白布めて襟をかけた登の業物落し指し首の入つたる小桶を携へ急ぎ足めて難波へ赴き福の門より案内もせずスト通りて大勢の乾兒の列を怖るゝ色なく福が前へ膝を進ませ先ごろお鶴の一件を日限を極て約束したるは其後何等の沙汰もあらず時過たる今日と寄り潔くお鶴を賞ひ度との餘り無法の



荆棘の花壇

や分返辭の印の此の桶の中をさめて来たを一覽して言分あらば拙者ふせ赤松彦四郎が承
まはらうと小桶をすつと投つけて身構へおしたる爲体又福をはじめ居列ふ乾兒等の何心を
く桶の中を看れば使お遣つたりし乾兒與三郎の首あるまぞこれのこゝかり駭く中へも一氣
に走りし乾兒等の再の仲間を首おして是れ見よがしお持て来た傍若無人お渠が舉動其返報
よの此田樂をおぶり殺しよ爲てやらんと立喋ぐを難波の福のこゝ、嘸々しい静よしんと叱り
鎮めて彦四郎は向ひ荆棘の喜藏と云ふ男の腹分腹のある男と是まで思つて交際たが高々賣
物買物の娼妓一人を賞ひおやつたよ大層腹お立つたと見お相手お足らぬ使の首を仰々しげ
お打落し持たせてよこす處をわいお思つたよりの小さい根性其様お男を相手おするの些と
大人氣おい譯おら乾兒を斫られた返報の此儘おしちやア置てへりら首を洗つて荆棘の喜
藏お吾が行のを待つてゐると疾く歸つて云ふが宜い馬鹿お奴ごと打笑ふ難波の福が大言お
彦四郎の憤懣お思へと手出しおせぬを卒然お切て出でよの返つて後お乾兒はトめ社會の
者の顔が立まい假令無念お忍ぶとも一旦爰の無事お別れ再び福の首を取る工夫は何程もあ
るからんと胸を定めて冷笑ひ此返報お來るからば介慮のあいうら何時でも案内おしよ出掛

てい 荆棘の乾兒の其方の様お牢着お年中腦んで苦しまねへら大勢助太刀を連れて來
おいと所詮首の取れ子へせと鸚鵡返しのお口は會釋もあさず座を立つて群れ立つ乾兒の眞
中を怖るゝ色お打通り九條村へと立歸り斯と喜藏お報知せおの動靜でい今夜も多くの
乾兒を引連れて押て來るかも知れ子へりら道方も準備をしてゐずおと云ふ喜藏の點頭て
夫の素より覺期の前和主が萬一福の爲は異變がわつたら縁出す手筈で乾兒も残らず集めて
あれと道方へ來てい市中の事ゆる直ぐ其筋のら手お道入らう夫れよりの寧の事吾の方より
押出して竹林寺の裏門傳ひ畔まで待つて斯やせよと一同の者へ指揮を示し當夜喜藏の彦四
郎を始め大和田の九助爲田の源次半鐘長お云ふ命知らぬの壯年と其他數十名の乾兒を引
俱し人數を整へ竹林寺(九條村に在り)の裏お沿ひたる田甫道より堤お出でよ茂りし蘆へ手
配をおして潜ませ置き卒と云はばと待構へしとい福次郎の方お毫も知らぬお名おし負ふ
浪花津よてい人お議られし俠客お殊よの喜藏と違ひ乾兒も數百名ある事おれお頭立たる
伊豆の國藏赤穂源ノッポウ竹麻嘉吉おとよ許多の乾兒を附属させ只一向お喜藏方へと先を
争ひ走來る狀を待設けたる荆棘の喜藏の夫と看るより菟れと聲を掛るや香蘆の茂みをおし

分けて願れ出たる乾兒等が或の竹鎗或の大太刀各自小振へ而も振らずも撃てりし思ひ
設はぬ此伏勢の難波方も一時の狼狽したれども喧嘩馴たる賭徒輩ゆる屈する色なく必死
とあり入亂れつゝ双方々火花を散して闘ふ所へアア待たと聲をかけ白刃と怖れず飛入
つたる亦一群の人数ありて連ふ禁の遮るので誰人あるりと能々看るふ是も一個の乾兒株堀
江の留藏と云ふ者よて此騒動を疾くも所つけ名に負ふ福と喜藏の喧嘩を他に聞き流しちや
ゐられずへと乾兒大勢引連れて儲こそ此場へ駈つけつゝ双方を押慰め終の起因も詳細にい
たぐ互ひお慕つて今夜の争闘の男を磨く社會での退み退りぬ譯ぞとの吾も承知を爲て居
やすぐ元を糺しやア大勢が生死争ふはどでも無へら今夜の事い左も右も吾も預けてか
呉んるせへ夫れとも耐忍が出来無へから勝手お喧嘩をするが宜が此の一番仲裁人お花を持
たせて両乾益一番任せてお呉んるせへと死地を怖れず飛込みし堀江の留が仲裁も吾とも云
兼双方とも今夜のお前の顔を立て此場の喧嘩を預けるうら面の立機爲て呉んるへと二言ど
云はず双方が承諾の辭は堀江の留の深く悦び乾兒は吩咐負傷せし者と勅りて當夜の夫形引
取りし後の話説の如何あるり且次回も記亞ぐべし

○ 刺棘の花壇

第二回

喜藏と福が喧嘩の事い近頃近在まで評判高く了得の難波の福丈ありて乾兒を庇護の威心と
譽じるもわれバ中よの亦與三郎の首を斬り福の方へ戻しく言分つけは遣つゝ喜藏の氣象の
面白いと十人奇をバ十腹の風説此社會よく喋々せしが爰も大坂曾根崎村に住む花車吉次と
云ふ者あり元の同村よく庄屋を勤め井上利作と云へる者の長男ありしき酒と賭博で親許を
勘當同様追ひ出されたる其後の宣事よして賭博よのみ耽り脊中一面花車の刺棘がある處
から花車と渾名をされ駭近邊でハ兄イハと立られて居るもの、聊の坐敷の花見勝負小
皿賭博の運上ばかりで他は買入のメメのあいこの乾益を持ふあいゆゑと賭博で折々噂を
されるの遺傳あとも思つこのか近頃喜藏が福の乾益を殺して首まで送つた事をバ聞くよ
り吉次の大きき欣び然らう云ふ手裏な乾益と持つて居るから喧嘩とあつても減多し退り取り
無へらうと早速那の彦四郎は面會して何卒乾益はお頼みなすつて今から乾兒よして下せ
へと請求めぐる其口振も小氣手が利て何かの用よ立べき男と思つゝゆゑ彦四郎の委細と聞
き置き或日此事と喜藏は語り随分見込みのある破落戸ですから乾兒よしておやりなすつて

も別よ恙りのありませぬと竟も喜藏と勤め込めて吉次と乾兒よさせこのみあらす自分も
弟分よして何かと愛顧よまてやれば吉次も自然と身よ儲が着き何處の賭場へと出苑ても判
練の喜藏が乾兒ごとと大手と掉つて歩行ゆえ盆のカスも餘慶よあり懐裏合ひもよくまつ
ので上福島よ宅と持ち以前から馴染でもつゝ櫻橋の料理屋談卯よ居るおうのと云ふ乾娘と
女房よ持ち小体よ活計て居るうち彼福と喜藏との喧嘩の高藤が尙解けず留藏が百般と固
くする氣で骨の折れとも理非ハ兎もわれ乾兒の首と打る隙があつて見れば何分話か纏り
かね左や右として日と送る折から其筋よても判練の喜藏が人殺しの罪あると以て捕縛の手
配ある趣きよバまゝ留藏が聞き込みされ何れよもせよ姑くハ身よ潜伏せるよ如くハあし
と夫等の事と喜藏の方まで内通しよので喜藏ハ欣び頭立つる乾兒と策めて渠等が喜藏の
と如何よと問へば彦四郎ハ打察は是しきの端事から捕縛での馬鹿々しから一時此場と避
ける爲め上福島ある吉次の方へ潜んで時節よお待させへ其上での亦何の様よか好分別も浮
みませうと勤められて判練の喜藏も成るほど然うと思つゝゆえ當夜情々地よ花車の宅と訪
れ委細と語と吉次夫婦も乾盆と思へば疎畧よ取扱とす奥の一室へ躲まひ置て折よ觸れてと

酒と肴め饗と慰め居るうちおうのハ了得よ乾娘脱りよけよ垢抜のしゝ阿彌茶館育も調
子も行届けハ早晚喜藏ハ懸慕して酔つての上の申戯よ打紛らしつゝ言寄りしよ浮氣稼業と
しゝ程めつて遂に否とも言切らず怪しき夢と結びしゝ寢に大膽ある男女あるが隠より顯る
るハ莫しの比喩度々訝を兩人の舉動と吉次の何時か嗅つけしゆえ以ての外に立腹して乾盆
ありと思へばこそ心よつけて忍ばせ置と好事にして女房まで慰まれてハ堪辨あらぬと怒り
の餘り思慮も亦く寧の事にと探索掛の磯島竹五郎へ喜藏の所在と密告しよので竹五郎ハ猶
豫あらずと同僚の者等と直さま捕縛の手配に及んと事よハ知る者ありてや密かに喜藏へ斯
と告しらせよゆえ開ハ一大事と物取敢ず上福島よバ立退る跡へ吉次に案内させ竹五郎等
が向ひのえされと薬脱けの売の主のあく手と空しくして歸つよので粗忽の訴へせしおんど
と却つて叱りと被むりし吉次の心に深く駭き設此事と乾盆が氣取つゝ通事されハ是非と
も尻よ持ち込むごらうと安さ心も亦き處へ彼の彦四郎が遣つて來よゆえ愕然といえたれと
今更に遁も躲れもあらざれば怖々ながら挨拶するうち何時に替らす彦四郎ハ一圓紙幣と把
り出し久し振りにて一盃飲むのら毎もの様に買つて呉んおとあうのよ渡し使と頼み出で

たる跡よて四下と見廻し小聲よあつて吉次よ向ひコレ花車手前の飛んど事といたので乾益
 が大腹立生して置かれる奴ぢやア無エと研りよも来さうな欄幕と稽く吾が抑あごめ那奴の
 首と切る事あら乾益が手と下すよの及ばぬい吾の勤めて乾兒よいた花車其言分の爲て来や
 せうと背負込んでコレ此通り短刀と持つて来たもの、段々他の奴等から様子と听けば乾益
 のおらうのと訝しあことした其腹立は密告したとの随分離しもやり惣を事汝ばかりの悪ま
 無エから此境の吾が萬事を引受け何様も乾益の腹と立くやうとも慰る工夫の何程もあり併
 し汝の當地は居ちやア其取銀も出来無エのら一旦大坂を立退いて他國へ走つて身と懸せ
 些少のら之れの旅費ごと投出とてある紙幣の數の何枚あるか知らねども萬死と出でたる
 花車のおツと一息顔色直り兄貴に斯んを苦勞を懸けちやア實は濟まぬ義理ですの他の事
 さら知ら無エ事現在女房を抱擁をされちやア何うも辛抱の出来なくあり前後の勘考もさく
 訴人をいたの兄貴の手前實は男らしくもあやせんが跡よて能く勘考ると乾益が居て呉れ
 あかつたの吾の爲めよヤア大徳伴面目次第もありやせんと打詫るを彦四郎が今更其様を事
 を云ふよやア及ば無エ一時も早く此を通ると云ひ置きて彦四郎の立歸つたる其跡へ着を聞



へ女房おらのの歸り姿を看るよりも花車の傍へ招き今まで何んも云とあんだか訝な事から刺練の乾盆と命の遺取でもせよやあら無二處を彦四郎兄イの辞より當分遠國へ走る積りから破れ畳は破れ行燈一品二品質種の残つた家財を離縁より與るから此まゝ斷然離れて呉れると云ふよおらの吃驚たれと再々喜藏との其間を知つたるゆるゑ起り高藤と思へば夫れ何ゆゑと聞くさへ心咎められ引とめ度い思へども詮方涙よくるうち吉次のおの買來たり酒を茶碗で二三盃ツと飲み干し其茶碗を庭へ投つけおらのよ向ひ無事よ瑕瑾なき那の茶碗も斯うぶち割つて疵ものごから元の通りよ繕ぎ合へても何うで無疵と謂これさい吾と和女も此茶碗後でゆつくり勘考て見ると立上りて用意の七首懐意よのみ表も出づればコレマア待つてと禁むるおらの手を揮り放りて落行けり話説轉廻刺練の喜藏の辛くも捕吏の向ふを避け天満川船村なる蝶五郎と云へる者方は潜伏きたるお吉次を訴人と云ふ事を聞くよりも以ての外は憤怒り撃て捨んと焦る處を彦四郎の運り察め郎公の腹立の道理なれと高の知れたる那の吉次を撃たんの爲めは設方一毛を吹き疵を求る様都合よなつて馬鹿くから萬事の私よ委しなせへ吉次の首取つて見やうと堅く保羅立

出でゆる喜藏の今も彦四郎の吉次の首を捉て來るかど待設けたる其所へ躍りかたれど花車の首らひ物持つて居ぬので首尾の如何ごと焦立ち聞へば彦四郎の笑ひお吉次乾盆吉次の障りおち落してやつたから案じなさんなと悠然と一た赤松の苔よ刺練の面影へどい又何んの子細とと急迫しく云へと些とと嘆の干乾盆郎公の那の野郎よ密告された其起因の必胸は覺のあらう許かぬ種を生へぬとやら此穿鑿の荒立ないの反つて郎公の爲めで有らうと故と吉次の有難尽して此大坂を走まゝな一たの未と夫れよりの火の附た郎公の腰幹を廻るゝ工夫がマア第一で有らうのら驚と了簡を極るのいゝせと云へば其場は居合一たる大和田の九助彦田の源次半鐘長など聞へる重立つたる乾盆も皆彦四郎の辞を賛け肩よ火の附く探偵の網を外し是から先の見込の郎公よありますかと問ひかけられ刺練の喜藏の打案したる体よくありしを稍く尋思を定めよや四人の者よ打向ひ吾の覺悟を究めちや居るのら何卒今の乾盆と乾盆の縁が断つて貰へてと云へば四人の顔看合せ中よも赤松彦四郎の膝をすませせ氣色を變へ困難極る此場は臨み縁と断れど平常の辞よ似合ぬ郎公の一言死ぬも生るも乾盆と俱よ爲やうと決心して此潜家へ出のける四人覺悟と究めた

と云る、八何う云ふ仔細の知ら無エが一緒よあらば火の中へも飛込ひ積でゐる私等他人よ
されとい情無エ夫とも四人の何事と協議するよも足り無エと愛相が尽くうへの事の動靜よ
よつら四人の乾兒ハ此で即公よ殺されやうと動手と坐する四人の体を見るより喜藏の奥
口看廻し傍よ差寄り小聲よあり夫ぢやア赤松を始め四人の者ハ善惡共よ此喜藏と同じ流れ
よ沈む氣かと期を押しさるうへ再云ふ機毎もの網と絆違ひ名よ負ふ福の乾兒を殺しゆゑ
の嚴重を此探偵での遅かれ速かれ御用よ爲り知て居るが高が名の無エ下制奴を殺し位で
處刑よあるのハ餘んまり意氣地の無エ譯らうら世障よ云ふ毒喫ハ重たでとやら是のうら
旨を變て五人の者が太く短く横行して豪家と見らる押入つて奪ひ取つる金銀の難儀を
者よ分典へ鼠小僧ぢやア無けれと死んど跡でも香華の絶えぬ義賊といふ名を日本よ海か
うと云ふ覺悟で夫れ故縁と斷うと云ふが是でも同意とする意のと思ひがけなき喜藏の辭よ
四人の中よの心中よ最と駭さるる者も在ども今更否ひ場合よ有ねば這の面白き其覺悟何せ
へ無事よ疊の上で往生出來無エ身分さうら今まで生よの儲よして供よ押了よ出のけせう
と各々齊一承知をせしゆゑ喜藏ハ深く打欣び其押入るべき手配を尙も密を語合ひより

○荆棘の花壇 第三齣

小悪み門戸を開けバ大惡續いて出るの比喩荆棘の喜藏ハ臍股の乾兒赤松彦四郎を始め九助
源次半 鐘 長おと云へる破落戸が同意をあして俱侶に不義の榮華よ耽らんものと密々押
入る先を甲の乙うと協議えさるが攝州灘の酒問屋柳屋何某こそ音よ聞こぬし豪家なれば且
手始めお襲ふて見んと五人の手筈を謀しつゝ或夜同家へ押入つて主個を縛り感しつけ二千
圓餘を奪ひしゆゑ是で路費も出來さうら一旦九州地方へ落ちて此氣を抜かうと兵庫よ出
で同地より和船の便を得て豊後の鶴崎よ渡り孰れも旅商客の体よ打扮長崎まで赴く途中も
豫て意とせし事あれば難澁者と見る時ハ多少の金を恵み與へ極實体お見せかけぬれども
根が賭徒ゆゑ惜氣もなく金を散て歩行しりバ早晚二千圓餘も残り少きに遣ひ捨し明治九年
の春よ至り荆棘ハ四入よ向ひて云ふやう斯く懷裏が空乏くあつてハ又一稼ぎと思へども土
地不案内他國での所詮大さお仕事も出來ず殊よハ万一足が就いてハ何うよ不都合が出來
るうら最う餘焰も冷よ頃ゆる大坂最寄へ立歸り見込みをつけて近在の豪家をわらして廻ら
うと思尋をしゝが貴郎兼よ好分別があるから聞のして呉ると問ひ掛くれバ彦四郎ハ打黙

頭成は乾盆の云ふ通り知らぬ土地に迂架くするより一旦歸るが第一だが茲又一ツの協
議と云ふの皆んも知つて居る通り吾の故郷と筑前をれば是より同國へ繰込んで假令纏り
た稼ぎの無くとも何程り勝手を知つたる土地ゆゑ一仕事をして其れを路費と歸る所存でと
りやすが乾盆此儀の如何だらうと云へば一同手を打つて成ほど兄貸が筑前の生れの者ど云
ふ事の知つて居ながら忘れて居る貴郎が案内で往つるから假令土地の不馴でもマゴツク様
あ事のあるめへ夫れぢやア直ぐは筑前へ押出す方が宜うらうと一同承知をさうししゆゑ馳
て長崎を出立して日あらず筑前福岡に着し彦四郎の所々を奔走し立歸つて喜藏は向ひ粕屋
郡で人あ知られぬ西田正左衛門の宅の勝手を悉皆見抜いて來ましまうら今夜同家へ押込ん
で一働ぎして來ませうが同家の音も聞かぬ家殊もと千息の幸一と云ふの先年農民一揆
の時勝れぬ働さがあつたとやらよて士族の列も加へられ武術も少しの心得てゐれば些度の
骨も折れやうが首尾能行へば其れだけの賃事の充分ありませう皆んを抜くらす働くべしと
内の案内の斯々と繪圖めて示し暮るゝを待ち粕屋郡へ出立行喜藏の準備の合燈照し且西田
の構へを看渡すも何さ富豪の家と思しく塀の悉皆硝子の缺け亦折釘の類を突つ立

て容易に忍び入り難き樹根と嚴重な修理より亦塀も沿ふて溝を掘り恰も一の陣營の異な
らず構への内にお建ち列ぶ倉庫の礎礎々としり喜藏の之れ等を打取遣り何さ聞かしま
勝りし豪家油断をして不覺をとるかと五人齊一繩梯子を家根より入りと引つうけて馴し盜
業の雑作も亦く塀の内へと乗入りしが爰より母屋に至るまで半町餘りも有る事ゆゑ彦四郎
の四個に明き吾儕の向ふの切戸より奥庭口へ忍び入り主個親子と威しつけ設手向と切つ
て棄ん其うち兄貴衆の土藏又掛りつて働ぐべし仕損じのから逃るの散々集る處の那の宿へ
と手筈を定め赤松の切戸の錠を捻切つて奥庭深く推入りぬ喜藏儕の亦臺所の門を頻り打
叩けバ應と返答て無惚け眼の下男が起出で何心なく開くる間選しと込み入る四人が下男の
眼先へヌツと差出す刃は怖れてアツと計り魂消て其處へ腰を抜りせし此物音も何事と出づ
る男を悉く縛りつけて白刃を打ち振り金の有所へ案内しると威しうけても只戰栗齒の根も
合す震ひ居るのみ斯とい知らず奥の間は臥る西田正左衛門の何事やらむ勝手許の騒がし
ければ起出でんと夜衾かい除けて枕邊を看るも六尺有餘の大男が夏荷寒き一刀を携へヌツ
クト立つる動靜も思ひがけねば仰天をされど素より氣丈の老人あれば隙さず側ある夜衾

を把つて赤松目かけ投げ掛けあがら賊入つるぞ孝一、油断するきと喚び入り、後へ
 すさつて床の間の刀を把つて立向ふ。此時次の一房は臥しる子息孝一の夫れと聞くより心
 得さふらふと突と起て長押掛掛る鎗追ッ把り鞘を拂つて座敷へ来されば彦四郎の正左衛
 門の爲りも被せられさる夜衾を脱ぎ棄て小櫃を老老歎念せよと太刀真向は振舞し切たるさ
 んとする處へ跳り込んだる孝一が斯と見るより一しとさしといて突出す鎗の穂先は彦四郎
 の身をかはし直ぐは附入り孝一が右手の肩先切らんとすれば此方の早速は後へすさり石突
 以つて丁ど受け互ひは手練の火花を散らし戦ふうち正左衛門の身準備して孝一が助勢を
 奪さんとする折しも喜藏の家内を看廻りながら座敷の方へ来て看れば彦四郎が必死とあつ
 て闘争處を正左衛門が今切りつけんとせし處ゆゑ曳いと聲りけ立向ひし姿は驚き主個の亦
 の再の賊こそ大勢あれ悴いよ、油断すかと彦四郎を棄て荆棘の喜藏は渡り合ひつゝ切結
 ぶ此間に九助源次半鐘長の所々を探して土藏入り正金銀貨紙幣の類を持ち堪へぬまで
 奪ひ取り馳て此場へ駈つけ来さる乾盆充分獲物をしらの吩咐の通り行ますせと聲をのけ
 つゝ抜つれて西田親子ふ切つて蒐れば彦四郎の孝一を庭へ連れ出し隙を看て逃んと心を決



荆棘の花壇

せしゆる喜藏を始め他の者も働ぎが出来ら此を構とす些とも早く走せへと云ひつゝ庭へ飛び下るれば孝一の續いて駈下りヤア此期及び逃がさうのと無二無三突入り突入る鋭き穂先を支えりね思はず後へ兵兵をぐら脚踏らし庭前の池よざんぶと陥入れ仕てやつらりと孝一が彦四郎の脾腹を目うげ刺徹さんと突おろす鎗の運よく腹を除け左の太股微傷しのみゆる宛て痛傷よあらざれ彦四郎の憤然と怒を發し池より上へ飛びがり大喝一聲眞向より二ツみあれと切りつけしが此狂勢ふ了得の西田も早速ふ太刀を拂ひ兼ね二足三足引き退きし座敷の内ふり正左衛門が三個を相敵の闘争も既又危ふくまつゝる休ゆる南無三寶と孝一の彦四郎を棄て再び座敷へ駈あがつゝる其間お喚笛を鳴らして赤松の速や引わぐる信號をもし元入り来りし切戸口より痛さと堪へ逃だせ喜藏を始め三人も親子を棄て逃げ出だすを已れ逃がして協ふまじと追躰んとせし臺所も縛あげられゝる家内の男女が各々叫び噪ぎ立つるを親子の邊も未だ賊情の居ると思へ逃る者も頼着もせず引返す此僥倖も四人とも恙なくして同家を逃出で謀し合せし事あれは聽て宿へと立歸りしが齊藏の彦四郎を働りて盗み来りし金銀を査むる紙幣の百圓も足らねども金銀貨もて千圓

餘り思つゝよりの金銀あるゆる再是のらんと乾兒の者情が問へば赤松打點頭今夜の様を騒ぎよあつて西田からの届ふより探察あるの忽ちあり殊ふの吾情の負傷と云ひ須臾も油斷の出来あいうら今夜のうちお當地をバ立退く工夫が上策あらんと言ふお執れも道理と銘銘元の旗商人と姿を變て福岡を立去り其夜博多の浦より潜切船を雇ひ其筋の探偵吏と詐稱辛じて海の中道へ沿ひ同國袖の港へ出で爰も亦も船を變へ送ふ長門國下の關へ渡りし同年四月上旬の事ありけり當地の荆棘が以前の友ある鬼熊の八五郎と云へる無頼の賭徒あるゆる一旦該家も落着きて筑前邊の大賭場も測らず社會の諍論出来餘儀なく其奴を殺して来りら當分潜して貰へてへと頼みかくれば鬼熊の二言と云は承知をして奥の一房も匿ひ置しが五人の會て西田方へて盗み取つゝる紙幣だけの乾兒の素への土産だと鬼熊の手も渡せし後の一圓五圓と金銀貨を出して紙幣と取換へをりし話頭後通柏屋郡ある西田正左衛門方よりの賊難の始末を其筋へ届け及びしを以て警察署よりの嚴重も此盜賊を詮議わりしお當夜博多より探偵吏と名乗りし五人の旅人が船もて袖ヶ港へ赴きしとの事あるよぞ其れを正しく賊徒等あらんと尙袖ヶ港を探索するゝと同所より馬關へ渡りしと相違わらじ

と判然せしむる同縣の警察署へ電報を以て照會のうへ捕縛方を依頼ふ及べしゆる同地も
ても専ら穿鑿し手を盡されし折りら近ごろ鬼熊八五郎の宅より金銀貨を同換する事屢々な
りと疾くも其筋の耳入りしを以て平常探偵も巧ある某甲と云へる者も命じ鬼熊方の動靜
を窺せしむ大坂の賭徒のよしよて五人の客が近頃同家より止宿をして此者等の手より金銀
貨を兩換するの趣きありと上申せしゆる夫れ五名の兇賊あるべし何れもせよ拘引て取調
んと早速警部巡查の探偵吏を引供し鬼熊方へ向これしに斯とい知らず八五郎の今日大勢の
乾兒を集め奇し偶よと骨子の目の勝負を争ふ最中なるよぞ今警官の來るるを看るよりソレ
と一聲嘆き立ち窓を毀して逃ぐるもわれは屋根へ上りて足踏はらし大地へ落て氣絶するも
あり其混雜の一方ならず警官等も駭きて此處に乗ら該賊を取逃がしての一大事故りらず手
配あるべしと分署へ巡查を走らせて出口へを堅固させ此家も居合す者共の一個も残らず
搦め捕れよと下知を傳へて片端より縛々繩をうけゆるる鬼熊と下り三十五六人皆捕縛す
ぞあつたりける必竟五人の兇賊も此人員の中ひるや如何も姑く次駒も分解するを听け
記者日第四駒よりいよいよ一重科七五郎の事歴も涉りて頗る佳境の物語あり

○荆棘の花牆 第四駒

福岡縣よりの照會より山口縣赤間關の警察署より於ての同地の賭徒鬼熊八五郎方は潜伏す
す五個の強盜を搦め捕らんと人數を配つて取圍まれしお測らず當日の大勢の賭徒が集り
制禁の勝負の楚を開き居る眞ッ最中の事あれば目投五個の強賊とよもに此犯罪人を捕縛
せんとせられしゆる其混雜の謂はん方なく爾れと幸ひ一個として抵抗する者もあがりし
ば難なく三十五六人の賭徒へ縛々繩をうけゆるるへ警部は主個八五郎を白洲へ喚び出し該
喜藏の事を問ひ糺さるるお包みもあらねば如何も其五個の者の筑前邊の大賭場は諍論
をして止むを得ず相人を殺して逃げて來りら潜匿て呉れろと云ひますゆる以前より懸意
き遊人の社會あり吾儕も往々ある喧嘩の尻持込まれり是非があいと其まゝ匿して置さ
しと包まず招丁をまゐる体は全く強盜の犯ある奴と知らず家も匿せしむ相違なければ右
五人の者共ハ斯々の罪跡ありて福岡縣よりの照會より召捕り向ひしあるが今日捕縛を
しる中も其五個の者のありやなしやと一々喚び出だし八五郎は突合せられしが手あ達
ひしもの賭の楚集るものよみよて喜藏を始め五個のもの網を遣はれゆるるや此人

數の中ありをりませぬと陳述せしゆる警察署にての大駭き再度人數を四方に配て探察されしが更に踪蹟の分明あらねば只得其趣きを福岡縣へ廻答とあり鬼熊八五郎始め一同の裁判所へ廻され夫々處刑とありしに遙後後の事あるを此後同人の話説きければ茲に記し置つ
紹前齣再説喜遊を始め五人の悪徒の該夜不意に起りたる捕人駭き裏口の塙根を早くも押破り何處と投しふる的も亦く各自離散て走りしが大和田の九助と半鐘長の思はず途にて一揃みありホツと一息額を合せ再て乾益の如何しうらうと心も懸れと迂闊くと立戻つて設押さへられて互の大事と思ふものうら探て配當を受けて金銀の多少両向の懷裏もあるゆる一旦當地を立退いて播州高砂の辰乾益を頼み身の落着を定めうへ乾益をじめ彦四郎源次大哥の行方を探る方宜うらうと九助の辞半鐘長も如何様其れ宜い分別所詮是れうら引復し處が今まで諍々して居る人でもあし首尾能逃げぬ違ひのさいうら案じる事とあるまいが不意に起つ今夜の網の至く賭場を目的でなく吾儕が居るのも知つる様子で前立つる一個の警部が他の者より五個の奴を捜せくと云つたのを確し耳に注たゆる乾益はじめ皆云つて其儘裏のら飛び出たが其れを思へば此邊はマゴく

またあら捕縛う何んでも走るが上策だと雖も相談を取り極めて身輕に打掛山のら山道ある道を通ひつゝ辛くも嚴しき捕人の網を遁がれく播高砂の浦に着きたるの同年五月の事ありし急て兩個の同地の俠客高砂辰五郎方を訪れ下の關の賭場で手が入つて逃げた時うら乾益と離散もありましたゆる餘儀なく陸路を上つて來ましたが豫て當方の乾益の處へ落着等でありますうら迷惑でも何卒暫らくお置あつて下さいと實事の確と語らねど多分の暗い身の上と蛇の道の蛇辰五郎の夫れと察して深くも問はず其儘兩個を留め置しが或日九助は面部を包み同地の町を彷徨するうち向ふの方のら來る男の何處やら見覚えある奴と行違ひさ能々看るは是れを抑々自分等が今の日蔭の身とあつた喧嘩の起りの福乾益彼の光三郎とありしゆる我れを忘れて思はずも眼光と喚ばんとまたりしがイヤ待てまばし大事の場所此方と面を包んでゐるのら那奴の毫も氣注くまい何處へ遁入るか見認た後半鐘長とも相談してまた詮術があるであらうと眼光の後から尾て行を知らねば何んの氣も注かず町裏頭ある人家に入りしを九助の篤と見届けて早々辰五郎方へ立歸り半鐘長を潜と招き今日測らすも途中にて乾益が馴染のお鶴を連れ大坂を逃げた福の乾兒光三郎と面會

またが吾輩を包んでゐたも先で心の注ぐ容子を幸ひよして後と尾け確よ家の見ど
 めて来たが那奴が此地お居るうらにお鶴の阿魔も一緒居て暮らす相違のあるまいが乾
 盆始め吾儕が此間い身よあつた辰の昔那奴等から起つた事ゆゑ今夜もあれ忍んで行か恨
 みと散らさば乾盆も縦令汚用よあつた後よも心障りもあるまいと吾の思ふが手前の所存の
 何んと思ふと問ひうければ半鐘長の憤然とあり憎さも憎い那の眼光素ッ首抜いて腹を瘡
 やうと同意をえたので九助も喜び其様から今夜十時を鳴たら出立けて行かうと課合せ夜の
 更るをバ待ち居たり話頭轉題該眼光の去年お鶴を連れて大坂を逃げたる後江州長濱よにお
 鶴の親族があるゆる姑く其首よ身を寄せるうちお鶴の事より荆棘の暮嶽と難波の福が喧嘩
 とありしを堀江の留が扱ひよて稍く其場へ濟んだれと何分よも喜滅の身ハ福の乾兒の興三
 郎を殺した事が耳よあり遂よ何處へる走つたとの噂を聞くより兩個の長濱を立つて播州
 路へ来たり高砂の魚屋藤兵衛の光三郎の爲よ伯父あれを同家へ便つて聊の資本を借り
 て魚屋とあり濟ましてゐるものゝ根が賭徒の癖が止まず左右お宵越の錢ハ持てぬと云ふ
 質するゆる魚賣とい名のみよて依然賭徒を本職よ迂染く當日を送り居たるが今日測らす



荆棘の花壇

も大和田の九助を見認められしと毫も知らず吾家へ戻り女房と小鍋立奇る對酌以熱酔あし
て兩個の枕を列へ臥したりけり既又當夜も更闌て遠寺の鐘の音も牙つ齒うみ無常の闇を傳
へ四下は寂と聲もなく軒端をさそふ小夜嵐は啼音も凄き野干の叫び狗の吼るを追ひ拂ひ忍
び寄つたる兩個の男は大和田の九助と半鐘長とて暫時内の様子を見ひ九助の長は睡くやう
「何んも白川夜船漕ぐ野の外の音のなきの寐入つて居るは相違はあいのら吾の内へ飛込
んで光三郎を殺す間お手前のお鶴を逃がさぬやう表を待つて首尾能しんと手筈を謀し大和
田の九助の短刀引抜き拵子戸を開いて内へ進み入り洋燈の明りも立廻せし屏風の裡を見て
あれば最と熟眠して正体なく枕下に寄り聲高く泥棒野郎眼を覺ませと云ひつゝ脚みて枕を
蹴返す此物音は駭く眼光の眼を開いて夫れと見るより俄破と起て早速の目潰し煙草盆を
火入れを把つて投んと去たれど此時速く彼時遅く大和田九助が突と身を寄せて光三郎の左
の脾腹を骨まで徹れと刺貫ぬきし強刀はアツと云ひつゝ倒れながら何奴されば卑怯にも名
乗をのけす殺すのだと道へば九助の冷笑ひ「何奴でもない荆棘の乾兒大和田の九助と云ふ
男だ乾盆はトめ此方等が今の苦勞も汝等ゆゑ怨みを散しに忍んで來たのだ短へ夜頃も長々

のよめへ言ひ廢しして念佛唱へて往生しろと聞くは駭く光三郎よりお鶴の怖さ恐ろしと逃
出ださんよも早腰抜け只がたくと慄ふのみ九助の亦も振鬨す刀の下を支ゆる眼光アレ人
殺しくと大聲立ると面胸ありと乗りうづつて咽喉の邊を力まきりせ突徹せバ鼻を堪のべ
さ虚空を掴み七類八倒苦しみながら敢みく息の絶ゆる無慘といふもあろりありお鶴の
始終此体を見るは尙さら魂消の聲立てんよも聲出でず這ひ廻りつゝ逃げんとするを表に
押し半鐘長阿魔ウヌ何處へ往けやアガると破鐘聲お吐鳴りつけられハツと其まゝ俯向け
よ伏して兩掌を合はす体を警度と見遣りて兩個の「荆棘の春瀧と人よ識られた大坂有名の
乾盆の顔と潰した汝が罪自業自得と諦めて觀念しろと容赦なくお鶴が唇を引つ掴みグツと
引寄せ乳の下へ突き込む刀お進する血は四下を染出して時からなく血 血 苦しむ体を
心よげお打蹴遣り居る折こそあれ脊骨高く駈足おて來たるは先刻光三郎が聲を立しお聞き
答め巡査の來たりしものあらん南無三寶と兩八のお鶴おどめをささずして裏山より逃げ
出だせし跡へ巡査が駈つけけるよ光三郎の既お息絶あれどもお鶴は未だ呼吸のある体な
れバ早速病院お於て治療を施されしハ未だ天命盡ざるよや一週日を経て少しの快氣とあり

聊り人事を覺えつゝ當夜の休爲を立てしゆる警署に於てハ嚴重に同個の監介兒を推偵ありしふぞ辰五郎ハ此事を傳へ聞き疾くも九助半鐘長の所業とぞつたれば或日兩個を密に招き聲を低らし道へる様一是れハ全く前方ハ目的を看けて云ふでハあければ此間の夜魚屋の光三郎を殺し女房ハ鶴ハ重傷を負せせた科人は未だ此高砂に居るとの事にて大分探索が嚴しいから其様事ハ疑惑をうけか手あつては万事の障り其れゆる吾ハ思ふより一旦今夜此地を落ち兵庫の鱈屋乾益を便つて身を匿しさせへ委細の事ハ此書紙ハあるうらはせへ持つて行けば引うけるは大丈夫な船も借り切つて置いたれば誰れも憚る處も無エ船頭ハ吾ハ乾兒安心として行なせへ當地に置け易けれと方一の事ハ有た其時ハ喜藏へ對して吾ハ濟無エ必ず悪く思はつしやるぞと行届たる深切の辰五郎ハ好氣ハ兩個ハ返す辞もあらばこそ乾益何れもやませぬ有難とさいやすと馳て高砂ハ吩咐せし船ハ乘組當夜の内に同津を發で翌日の夜兵庫港へ着たるゆゑ此にて高砂の乾兒ある船頭ハ分を告げ同港の決客屋與三次方へ落着彼書紙を出て委細を頼しよ二言ともかく承諾して亦も同家ハ潜み居たれど只心づゝりの喜藏ハ四郎源次の身の上にして其後奈何ありしものと案暮して日を送りぬ

○荆棘の花牆

第五齣

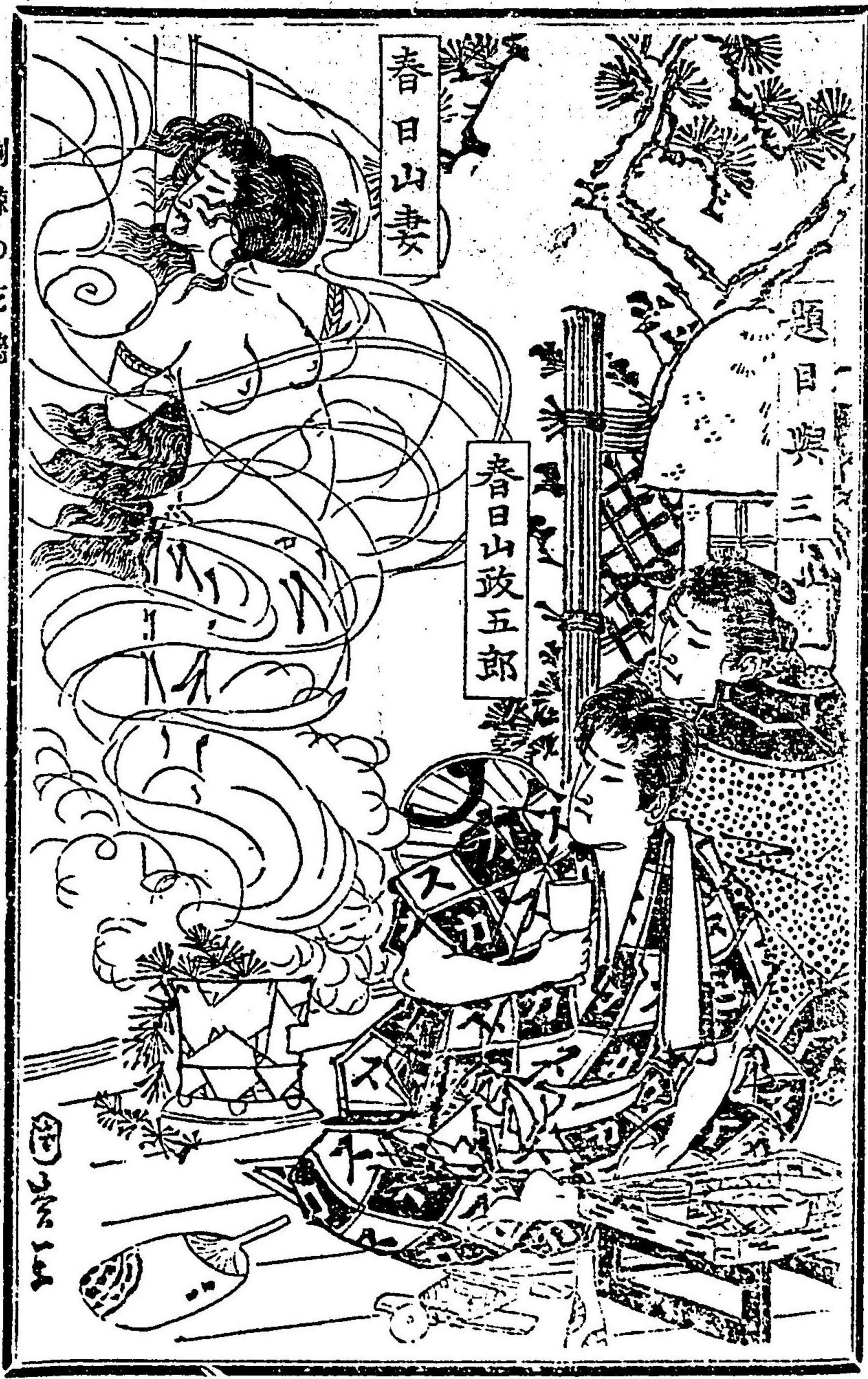
紹前齣再説大和田の九助半鐘長の兩人ハ鱈屋與三次方ハ身と潜めて喜藏を始め其他の者ハ如何ありしものと案ト煩ふ折り或日備後の納の津より兵庫へ入船せし住吉丸の船頭猿島の徳藏と云ふハ以前與三次の乾兒にて同港よりし者もゑ着船毎ハ同家を訪れ乾益くと機嫌を聞くので今回も土産の保命酒を携へ與三次方を訪ふ來たりし折り主個ハ不在されど女房ハ向ひ語のうち過般納の津で大した賊が捕虜られ福山裁判所へ引致ありましたと道ふを傍て聽居る九助が胸おぼされ膝をすり寄せ然らして其泥棒ハ何んど云ふ奴でありましたと尋ふ徳藏打黙頭附れば聽りれよ其賊ハ何ハ筑前福岡で人ハ識られた劍術の達人赤松彦四郎と云ふ浪人にて先年大坂へ上りし後ハ或博徒の方ハ身を寄せて遊人とあつてゐたるうち社會の喧嘩で人を殺し五人連めて大坂を逃げ九州邊を徘徊する福岡の城下外れ粕屋郡の西田と云ふ豪家へ押入金銭を奪ひ長州路まで逃延びたれど此にてお手あ達つたのを亦辛して同所を脱け他の者等と散々あり彦四郎ハ其乾益とやらハ備後の納へ通げて來るが嚴しい詮議ハ潜伏覆せず竟ハ召捕りあつたれど乾益とやらハ運よく切抜け彦四郎だ

荆棘の花牆

けの繩より今裁判所で調中との事此捕物の時、浦中を轉覆した大騷動が起る事、出来ぬものサと一伍一什の物語を聴居る兩個の心は駭き再々遂々彦四郎兄は御用なつたと思はるれど未だしも乾益が捕縛ぬの傍俸なれば早く所在を捜し度と云はず語らず眼を看合せ黙頭合て居りけり當夜兩人の同地の牛肉店に赴き九助の長お道へる様今日の語説を聞くうへに所詮當地は落着いても乾益は逢へる事もあるまいから準備後路は行き彦四郎兄の様子を索り首尾を謀つて偷み出す工夫を爲やうぢやあるまいのと相談のけられ半鐘長も何うせ處刑もあるまでの暴れ序いで暴廻り兄を牢うら偷み出し亦大業を働かして夫れをら年貢を納やうと謀し合せて立出る表も疑ふ探偵掛が御用があるうら屯署へ來よと道いれて南無三見認つたりと豫て所持せし七首を把り出ださんとする所を信號の呼笛はバラバラと駈附來たる警官が力を添へて何んなくも兩個を押へ繩をのけ警署へこそ引られたれ开も此兩個が如何にして斯容易も捕縛もありしと聞く喜藏彦四郎ともも又輛の津は於て召捕れんとしる齋田の源次、其時網の目を通れ備中へ出で山うら山と路なき路を幸ふじて是も播州高砂に來たり測らず眼光の殺害されし噂を聞きしゆゑ多分の九助半

鐘長の所爲あるべしと思ふも、兩個の必ず此近國は潜伏するは相違なし奈何がゐして面會せやと尋思を定め姿を扮し兵庫まで來し折うら鯉屋與三次方は兩個のをるを識り當夜尋行うんとする所を風俗の怪しさより巡查お押へられ同地警察署へ拘引となり取調られしが始に族籍姓名を偽りしも同署の探偵掛は源次を見識りの者ありしゆゑ包みおはせず從來の犯罪の廉々を招丁よ及び九助長の兩人が鯉屋方よをる事までも申し立しおぞ早速探偵掛が同家へ取調ふ向ひ見ると今外出せしとの事されば所々も手配し牛肉屋の二階もあるを取押へ再こそ斯に引致となりしされ斯く當年の暮お至り赤松彦四郎の福山裁判所お於て斬罪を宣告され九助源次半鐘長も兵庫裁判所お於て絞罪お處せられしに孰れも同時の事おして是れ罪惡の應報なり單喜藏が行方知れず不思議は天網を遁がれ居たれど其生死如何の後に至りて説く所あるべし別分説花車吉次の赤松彦四郎の厚意おて大坂を立退さしが姑く京都なる會津の小鎮を便り居たれど設喜藏が上京する事もやと思へば此もも落着て居られずと以前自分も素人相撲を取りし頃懇意おせし春日山政五郎と云へるが今江州八幡にて可也な顔おあつて居るとの事と聞いては訪て往たから奈何ありと身の振方も着くで

あらうと八幡へ行き政五郎を訪し聞きし増さる権勢にて乾兒も大勢ある動靜も以前互ひ小鍋立の筈突合つたる中あれど何んだの心怖けが附きオイ春日山とも云ひ兼て政乾益の宅ですうと小腰を屈め案内を乞へば春日山の一眼看るよりオ、珍しい花車サア、此方へと昔お替らぬ待遇ひめて女房お嘉代を始め乾兒等へも是れハ吾が大坂に居る頃兄分おしと花車と云ふ人だと一々お紹介せ再て何用で此地へと問はれて吉次ハ頭を掻き語をするも面目無エが實ハ女の一件うら些度土地も居懸うあり只得兄貴を訪て來さか厄介ながら當分のうち乾兒お使て呉れ無エうと明けて云ハねと色高藤と推量おしたる春日山の乾兒の何んのと其様お事心配せずと吾が内ハ何時までなりと居るがいと道はれて吉次の安心の眉を開きて政五郎方の食客とあり日を送りぬ原來此春日山と云へるハ元八幡の出生よて幼年より相撲を好み素人組の中よてハ前頭まで取り上りしゆゑ大坂の頭取淡由良右衛門の幕内おあり春日山と名乗三段目おがらも可也人氣の宜のりしなれど酒と賭奕ハ仲間の規則を度々犯す事があるので竟ハ親方より破門され詮方おく元の宮相撲取となり故郷の事ゆゑ八幡へ歸り村内の壯丁等を弟子と持ち關取くと稱られしより後ハハ好きな賭博社會で



荆棘の花壇

識られる顔となりしうへ退々乾兒も多くあり今此近郷は隠れきき乾益社會となつたるが
政五郎の土地は評判の好男子ゆゑ左や右と袖を曳く浮連女など最も多けれど未だ定まれる
妻としてなきうち或日同地の八幡祭は春日山を大鬧おして素人相撲を催はせし時此相撲を見
物ふ來たる同國日野の商人竹屋與兵衛の娘お嘉代が深く春日山は懸想をしたれど夫れとい
丁得ふ云ひ兼て祭禮も嫁り親俱日野へ歸れと春日山の其面影が眼を遮り食もすす
ブラく寐るともなしお病痾の原を知らねば兩親の太く腫き醫師よ藥と心を痛めて治療を
盡せと更主治のあらざるにぞ與兵衛の妻は打向ひ親の眼のらり毎までも子供の様と思つ
て居れどお嘉代の今年十七ゆゑ殊お寄つたら惚れたとの好たとう云ふ事でもいひ何うせ
嫁入さす身の上篤と心底を聞いて見て先さへよく掛合て嫁入さす宜からうと所天の辭
お女房も成はど是れ宜い所へ氣が注ぎました併し妾を問ふたどて其れから然うとい云ひ
升まいから平生中の好い乳母のお辰を喚びよやつて問はせませうと早速お辰を招き此趣き
を言合め娘の意を問ふて見てとの頼みよお辰は承知をしてお嘉代が臥したる一室へ行儀さ
ん久しよお尋をすませぬがお心持ちの如何ですと枕邊近くへすり寄つて四下を看廻し小聲

おあり其れどのあし胸の裏をば索るお辰が艶しい辭よお嘉代も始り包んで居たれど實は
先ごろ爹様と八幡祭へ往つた時に彼春日山を眷戀たる一伍一什を物語しゆゑお辰も先
おそれ悪い人よと思つたが意見をしたから猶更は病痾の募りよあるであらうと故と陽に咲
ひを含み嬢さんのマアお氣の弱ひ其様から然うと妾よまでお早くお听かせなされたなら此
お煩ひもあるまいものゆゑ兩親への妾のらお話してお望の借度協へてあげませうと慰め從て
與兵衛夫婦お簡様く物語たゆゑ是れも大きに駭いて農家り町家の眞面目お人から直ぐ
よ相談もえて見やうが相人の名代の破落戸質氣の家の娘をば相撲取の嫁おひやれぬと不承
知云ふのも有理と思へば強てお勤め兼ねお辰も其ま手を曳きしが薄々夫れと听いたるお
嘉代は嫁よやれぬと仰しやるゑら妾の生てをりませぬと飛び出だすべき懇動があるので兩
親も心を痛め親類縁者を喚び寄せて奈何したものであらうかと頼を合せて協議せたるよ相
人の餘り好もしうらねど此縁談を破つたあらば思ひ詰たる娘氣お何んも不了簡を起すりも
知れぬいらら學生涯不通の約めて嫁よ遣つたら宜からうと發議をしたる親類の説を執れ
も賛成せしゑる與兵衛夫婦も親子の縁を斷るの心よ染まねども否む譯おもゆゑので亦た

後々如何ともまやうと得心をして協議も一決たぬ乳母のお辰は仔細を話し同家へ一旦養女を遣り其うへて政五郎方へ嫁入す筈は取極めさぐ此方の是れで宜けれども相人の政五郎が此事を承知するやら爲ないやら此言込みの誰れを頼まんと甲の乙のと云つゝけ居る折うら素人相撲の行司をする木村七五郎と云へる者の恰好お辰の悪意されば是れら政五郎へ語をさせ可否を聞いて見ませうとお辰の直地お七五郎へ緋の様子を委嘱し其れ何より結構を乾益も獨身ゆゑ決して否といふ云升まいと早速八幡へ往き政五郎はお辰の頼れしと此一條を語し二言と云す承知をし故万事の相談纏つて與兵衛方よて不通過の姿で竟はお嘉代の政五郎の女房となり豫ての望と違たるが死んとせども覺期をした其戀男と配事なれば夫婦の間も最睦じく月日を送し折のら花車が同家お來て厄介とあり最と精悍しく立働を継令政五郎が不在とも萬事を負擔堪を明又お嘉代の氣お協ふ様内の結他の乾兒の引立方お氣を注て俗云ふ如才のささもこのら彼の川柳點ある如く密通の亭主の方で先へ惚れと政五郎も花車を二さき者ぞと思ひ居より澤てを委嘱し其うちお給様の如き噪きとある其趣の次駒へ説べし(前駒の挿書お齋田の源次とあるの大和田の九助の誤り)

○ 人松島よ遊女の應援
岡高樓よ幼子の復讐

月窓一夕譚

彩霞園柳香稿

第一節

夫れ三河國西加茂郡舉母と云へるの内藤山城守の領地にして代々二万石を封し小藩されど文武の兩道の専ら獎勵をたりしもの他藩名を識られし者多く出る中又御用人次席を務る岩槻平八郎(四十六)と云ふ者ありけり妻お國(四十二)との間も男女六個の子あり長女お時(二十)の同家中太田清九郎の妻に遣し長男平太郎の平八郎の從弟たる勢州津藩村山徳右衛門方へ養子お遣し名を更めて徳左衛門義國(三十二)と呼ぶ二男傳十郎義久(十八)を岩槻の家名相續人と定め二女おはる三女お藤四女お菊等の孰れも幼年をれば未だ父母の傍あり傳十郎の山城守殿は扈從して江戸表よりしが父子とも忠勤を勵み勤めしり領主の愛も愛度して一家睦ましく鳥兔を経過ぬ單表平八郎の妻お國の妹おお濱と云ふ者あり姉より一層標致も優れたる者あるが仔細あつて同國宮口村に住居する大照院多門と呼ぶ法印の妻とあり開も此多門の素性を索聞く元相州小田原の城主大久保加賀守の藩中ふて里見小左

月窓一夕譚

衛門と云へる者の弟ありしが幼年の頃より武藝より出精して遂に石巻山我其流の鑑奥を究
め一番中多門の右より出る者ありしより漸次我其流の心出で夫れのみならず性得酒色も耽
るの癖あるよど小左衛門の深く之れを誡め汝聊う武藝より達したると謂へ未だ部家住の
身分もて斯る不品行ありての上への聞ゆるも宜ろしならず屹度向後を謹むべしと説諭せしゆ
る多門の深く後悔して其後の酒と一滴だも飲む事おければ自然と品行も矯正益々武藝を
精練したりし頃及三月三日上巳の節句今年に賀守も在城の時おれば士分の者への拜
謁を仰せ附らるる旨達せられ孰れも辰の刻より出仕をぞおたりける當日賀守殿より環て
多門の武術上達を聞き及べしゆる目前に於て一太刀合すべしと小左衛門へ御沙汰ありけ
るも同人の早速御受申し多門を御前へ喚出し君命を傳へしよ亦賀守の側近福島金之
助へ汝多門と立合べしと沙汰せられしゆる之も畏りて御受申し馳て兩人とも身準備おして
立向ひしが金之助も齋藤彌九郎の門にありての屈指の劍客と謂れし者あり多門の我其流の
達人あり孰れ劣ぬ壯士の試合に賀守を始め列座の諸士一同片嘴を呑で觀覽せり當下兩人
の懇懇と馴し古實の式作法各々木太刀把おけてじりじりと立上り互に觀ふ虚實の息を

集つて切込多門が小太刀翻りと轉して附入る大太刀得たりと早速の後飛丁とらけたる窓の
月見込だ清眼開いた八双十味の位踏せりもまた立別れ發矢く緋々銀虎劔々術の是極必勝
手を盡し汗を絞て擊合し多門の技や優けむ金之助が面小手を横で二本切込で遂に勝を
得たりしゆる賀守の淺うらす感心され聞及し立後多門が技の練磨のあと賞賛の辭を
賜しうへ手射銀刀を與へられしゆる里見兄弟の面目を施し退出せしが歸邸の後小左衛門の
多門を傍近くへ招き今日の御前試合お勝利を得たるの一家の榮譽之れ單に汝が武藝上達の
致す處おれは今日の兄が更り一酌を許すべし快よく飲食して平常の勞を慰むべしと豫て命
せし酒肴と列べ自分も銚子と執つて盃を備めしゆる多門の兄の慈愛を欣び杯を把つて押
戴き絶て久しき甘露の味ひ五臟六腑を循環し忽地として大酔せしゆる小左衛門の打咲ひ
日頃よ似もせで飲量の少なきの兄が意見も能く用ひ長々禁酒の故あるべし人の酒を飲ひ
當然おれと酒々を飲ひに至りては遂に其身を忘るるなり只今頃の機嫌こそ百藥の長ともす
すべけれ向後も此の度量を能く辨へよと説諭すよぞ酩酊おがらも本性迷ひぬ多門の深く之
れを謝し杯をおさめて吾部屋へ踰跟として立歸りしゆる醉ひしと云へ今までの兄の側よ

る事ゆゑ何となく窮屈の心地せられしも其座を起つと酔ひも増し頻ふ火情の發動するよぞ
 吾部家あとしてハ落居難く運動旁々近邊を節句の祝儀に廻らんと兄も告す立出でしが同藩
 の執政頼大久保兵庫の邸へ赴き玄關より案内を乞へども折節來客ありて混雑中の爲の執次
 に出づる者もあければ名刺を置きて其儘立歸りあハ仔細あかりしものを彼生醉の癖として
 ズカ／＼坐敷へ打通り突と應接の間へ至り見ると御守殿姿の女中一人威儀を正して居る
 にハ多門も心よ駭きたまれど此時ハ最早充分ハ沈醉せし事あれば遠慮もあく婦人の傍よ
 坐しコレ／＼何處の奥方あり存せねど小可ハ里見多門とハ慚情生あり以後御見識下さる
 べしと挨拶すれば該女中も叮嚀ハ會釋あし御名ハ嘗てお聞きさせしが倍ハ貴郎ハ小左衛門
 様の御舍弟多門様おて在せしり妾ハ福島金之助ハ姉宮尾とやす者當今ハ大奥ハ務めをりま
 する爲め御役附の外の業ありは目よ懸る事もあく夫れゆゑ無禮の段ハ免させ玉へと折目
 正しく行儀を素さす述べざるを聽きて里見多門ハ今日ハ前試合ハ打据たる命之助の姉ハ何用
 あつて執政の邸へ來るやらんと心よ不審ハ懐けども然る事項まで明白ハ問もあらずと同ヒ
 火鉢の傍ハ進み宮尾の顔を熱々瞰遣ふ世も稀ある佳人の容貌霞よつ／＼ひ色も香も遠山櫻



年頃も花に比へて盛あるべし小町西施も之れふりものゝ寔に美人ある美人より我を忘
れて茫然と轉春心を動らすも酒の科堪へ兼てり雪より白き宮尾が腕を腕と抱れば此方の
其手を拂ひ先刻より酒樽嫌と差扣へをれば好事として不作法の舉動今日の大奥の侍使
も参りしかり疎忽も事して後悔あるかと云へば多門の冷笑ひ其大奥が何より懸望秋の味よ
り亦一層甘味の深き松茸を汐澤山を始と合鍋おして進ぜると卒然宮尾を引提へ獲らの
舉動も及ばんとするにぞ宮尾の太く立腹して突放さんと焦れども劍客多門は懐きすくめら
れし事あれば今何とぞする事能はず只得アレロくと聲を立つる折より駈來る大久保
兵庫の夫れと看るより大に駭き無禮者メと大喝一聲叱咤おがらる其場も來れば後に引屬ひ
四五人の侍士駈つけて遂も多門を取て押しが兵庫の如何して多門の此席もありしやと宮尾
へ尋し先刻よりの事を以答しにぞ重々不屈の至ありとて此座を目附役へ通下多門を引
渡ければ早速兄小左衛門を喚寄云る様多門殿義今日執政兵庫殿の邸に於て斯々の乱
行あり殊も宮尾の大奥の御用も付同家へ赴られし際あれば旁々輕からぬ事共あり仍て多門
殿の吟味中貴殿へ御預りありと沙汰ありしゆゑ小左衛門の駭の一方ならず再の今日解いた

る禁酒の酔も乘じて亦斯る大事件をば惹起せしからむ切角今朝の御前試合の家業を得
たりしぞと歡問もあく乱行の汚名も其身の恥辱を招く其起因こそ酒あるべけれ反くも禁
酒を解さしむ小左衛門が一生の過りありしと深く後悔おしたれと今更云ふて只得事と雖て
多門を引致立歸ると其儘細目の恥辱も白川夜船高野正体もあく臥したる姿も小左衛門の嘆
息おし人品おら骨柄おら文武兩道お達したる適晴勝れし身分もてありおがら酒癖の爲めお
斯くまでも性根を奪これ恥を取と思ひの舉動も至るとい寔に淺問しき次第ありと須臾顔も
得おげざりしが弟とい謂へ上より預る犯人おれば等閑もあらずと角助と云ふ下僕も吩咐多
門の傍に屬置しが當夜成刻ころも多門の稍く酔ひ醒めて吾も復れば甚麼お同腕を縛められ
ありしゆゑ爰お至りて始て酒興の乱行を聊お思ひ出だし後悔の外おのりしが角助の傍らよ
り若旦那醉ひが醒ましたり貴郎様の乱酒も久しいものぞが此度のマア途方もない事をなさ
いしましたナアと云はれて了得お面目もあく多門の下僕も酩酊中如何ある事をさせしあるかと
問へば下僕も兵庫方もてありし次第を語聞おせ御目附衆より旦那様へお預けおありし云々
と告げたるも多門の駭も大方おらず吾骨つて酒癖あるが爲め兄上より堅く之を戒嚴られ

今日まで慎みをりしうを測らず、前よ於て試合も勝利を得たる悦びとて、兄上が射ら杯を把つて授玉ひしゆゑ心を解て飲む酒も遂に平常の戒慎を忘却し、斯る不都合を醸せしものあるべし。今角助の云ふ所を聞けば、兵庫殿の邸へ赴きしとの事あるが成はせ、熟々勘考るも同家お至り案内を乞へども執奏ささまじ、勝手を譲りし應接の問は打通りし折福島の姉宮尾とやらんがそりしまでの覺たれを其他の更も忘却したり。爾りながら、目附より沙汰ありて兄上へ預けられしと、ゆるうへの如何ある、答のある事やらむ悔て、従らぬ事ながら、淺聞しき事爲てけりと須史の嘆息の外ありしが、再心お思ふ、様相人の宮尾の今日、試合お恥辱を興へし福島の姉あるのみ、大奥の中老を務るとあるうへの重く、斬罪輕くて自盡の必定あるべし。吾性來酒の爲よ身を過つと雖も、文武兩道よりうけてのをさく、人お後れを取りし事おし然るも、只一時の酒乱の科めて命を斷るゝの如何も遺憾あり、業甚だ卑怯よの似たれとも、一旦當地と立退きて一層文武の道を練り、今日の恥辱お勝りたる大功を顯し、其れを謝免の種おすべし。大丈夫の決斷の斯る事を云ふあるべし。但、汚預人を取遣せし過ちの科を兄上よ、飯せさせん事のみ、呉々も不孝よの似たれども、是とて亦後日よ報酬おし奉らんと、願て精悍しく身準備して

庭の松ヶ枝に攀登らんとするおぞ、角助の駭きて若旦那よの未だ、酒の醒めざるう、但し、狂氣爲玉ひしりと遁ると、心注のされ、押禁むるを、聞く多門の打笑ひて、角助は向ひ此多門の文武兩道を練磨の爲め、只今より、返電致すかれ、兄上へ不孝の罪の追てお詫をすすと傳へよのしと、再び枝お脚をうけ、堀と乗、論んとの景状を看るより、角助のいよく、駭き、拙者の旦那様の吩咐めて、郎公の身を張番おすあり、遁られて、此身の落度、然らうのさせしと、續いて松へ攀登はらんとする、動靜お今、是非おし、惘然おがら、一命呉れると云ふ間も、あらず、抜おろしたる、刀の下お憐むべし、角助の肩先、深く乳の下まで、切り下げられて、肯ぞ堪らん、アツと一聲、松ヶ枝より、落ちて、忽ち息絶たり、此間よ早くと、夕月の雲も、隠れて、騷氣ある途を、幸ひ飛た如く、よ行方も、知らず、ありおけり、斯と知らねど、小左衛門の今庭園お物音して、叫びし、聲の何事やらんと、手燭を照し、駈つけ見るよ、弟多門のを、らすして、仲間角助が、血お染みて、死んで、をり、小左衛門の、太く、仰天おし、再い多門の、角助を、殺害おし、出奔せしものと、覺ねたり、重々惡き、舉動の、お其身の、非を、お覺知お、お潔よく、割腹して、罪を、謝すべきよ、身を、遣れんと、い武士よ、あるま、トさ、卑怯未練、殊よの、現在、の、兄が、預り、人と、知り、おが、仲間を、殺害おし、遁亡に、及びし、事、謂ん、方、おさ、人、非人、遠く、の、行、ト

追放けて兄の手も懸け成敗ささんと憤然として立上る折うら目附鹽谷武左衛門の君命を
限ひ入來との報知ゆる小左衛門の再び駭き必定的多門の涉沙汰にてあらんよ取遣せし事を
申立てんより寧茲にて自殺をせんと刀の鞘も手へのけられど亦熟々と顧慮すよ今此處にて
切腹ささば多門を取遣せしよよく吾執計ひありとの冤名や被らん左右おも此場に至り
亦是非もなき事あれハ謹んで君命を拜受して涉沙汰を待たんと衣服を更め出迎へハ武左衛
門の座に通り辯を正し云へる様其方々弟多門儀今日大久保兵庫の邸へ赴き酒興のうへと
やしちがら奥文中宮尾へ對し如何の所爲あらんとせし重々不屈の至りあれハ重き御處刑
をも仰せ附らるべき筈あれど格別の御憐愍を以て追放仰せ附らるゝありまた其方の必竟多
門への教育方宜しのらざるよ據り斯る不都合を生せしに付謹慎仰せ附らるゝありと述べ
ハ小左衛門の君恩の寛典も出でたるを恐れ入り但感涙の外にあくて須臾頭をだも得わけざ
りしが武左衛門の辭を更め再里見氏御舎弟々今日の舉動實に御心中お察しあり爾りあが
ら上にも同氏々武藝を深く遺憾せ玉ふの餘り斯く助命の御沙汰ありしあれハ不心得のあき
様君命の忝けなき事を呉々々聞けられたしと公私の差別情誼を陳べ暇を告げて立飯りしに

ぞホツと一息小左衛門の始て蘇生の心地あせしガ爾るよても斯る君恩の寛大あるを想はず
下僕を殺して遁亡す弟々不所存假令今宵の覆むとも早晚發露す時の上を取さし辨解立
ち難し此趣きを書認め割腹ささば自然多門の行跡も正しくあり再び君家へ涉詫びの協ふ期
もあるべしと正直潔白の小左衛門の一圖に面目あしと念慮決せしより當夜一通の遺書を認
め切腹あして死しされど同人にの妻子とてもあき事ゆゑ翌日よ至り出入の者々覺知し其筋
へ届け出で檢使のうへ死骸の親族の者へ引渡しとあり終り其家斷絶とありしハ亦是非もあ
き事ありけり話頭復題里見多門の夫れより夜を日に亞き三州岡崎の城下よ來り本多家の
藩士都築源八郎と云へる者を訪ね此度の顛末を詳細明し姑く潜伏吳まトきやと頼みしハ元
此源八郎の多門と劍道の同門にして死を誓ひふる義兄弟あれハ少しも否ひ景色のあく二言
と云はせず承諾あし裏の隠居所よ起臥させ何不自由なく住はせし多門ハ小田原の動靜を
索らんと悄悄地に都築へ語しよ早速腹臣の下僕荒井與助ハ吩咐小田原へ遣し里見家の事を
聞き糺せしよ聽て半月餘あして立飯り云ふ様にハ小左衛門の切腹して果たるゆゑ家名の斷
絶したる云々との事あるよ多門の駭き大方あらず再ハ拙者を脱走させし筈よよりしあら

ん爾るよても餘奇酷ある處置ありと深くも大久保家を怨りしたれど其原を問へば吾身の酒
亂より生せし事あり左も右にも過てりと後悔の涙も暮れ突然佩刀を抜いて鬚を斷ち源八郎
に向ひて云ふ様听うるゝ如き兄の最期之れ皆單に拙者ヲ爲せし科にして俱に死せず何
以て地下に於て兄は目見べき然れ共吾少しく後來を望む所もあれは今死する此鬚を以
てし精神の今より佛門に入りて亡兄の後と吊りんと宛もの劍客も打測れて見なければ源八
郎の其心を察し強てとも制止め兼如何も道理ある貴公の辞此うへに隨意おせらるべしと
て聽て一包の金を響纏ふとして渡せしうば多門の都築の厚誼を感し今まで御厄介ありしと
へあるよ亦此金を受納るゝ太く心は愧れども何國を的と定めなき身を雲水に委す身あれば
落つく先のあるまで姑く借用致すにこそ亦此兩刀の失禮ながら吾々紀念とも見とさせら
れよと源八郎は渡し惠投の金を懷裏おして飄然として岡崎を立出でしが同國舉母興教寺と
云へる禪刹より知己の者より住職をす由を聞き及びしゆゑ是れお便つて禪門の奥を索るべし
と聽て同國加茂郡より立入し後の話説より如何ある締めてお讀の婿とあるの趣きの且く次章
よ説出すを讀みて知るべし

○ 人松高は遊女の戀接
囃高樓は幼兒の復讐

月窓一夕譚

彩霞園柳香稿

第二節

却而説里見多門墨の衣よ容体ハ變ねど心ハ只願佛門ハ傾き禪門の藍奥を究めんものと岡
崎を立つく同國舉母なる興教寺よ來り住職を訪れ素志の逐一を語り佛弟子ならんとを乞
ひこるよ住職ハ早速承諾し當日より興教寺よ傳まりて専ら勉學よ怠りあがりしが頃及卯
月の中旬過ぎ寺内の庭に咲出づる通櫻と觀んとく聚ふ來る人の多ければ例年の如く小商人
等が地内に店と列べ最と賑ひを究めありける折らら今日ハ家中の女連れが七八人にく觀花
の催しおし眺め能き場所ハ毛氈を布き持參の割籠酒筒を開き睡まじく樂しみ居る處へ何
事ぞ花見る人の長刀と彼の俳借に吟せし如く無雅無風流の醉客が傍若無人に婦人さへ見れ
ば引提へて乱暴おとにぞアレヨ〜と通感ふを興あるよに思ふてや亦ハ酒癖の業あるの後
にハ帶せし刀と引抜き樹木の枝を切り廻れハソリヤこそ抜いと負傷するると右往左往に
混雜する此時彼の花の下に在りし一群の女連れも此上さく駭き逃げ出さずを夫れと看認めし

暴客が飛び來つて其中なる年齢十八九とも思しき娘と捉へ毛氈の上に引据ゑるせす傍に
刀を拵をきて柄を膝にて緊と押へ娘の顔と警度暇遣り誰のと思へば岩槻氏の息女お時どの
是の好時機に御目に懸つて豫て和女と夫婦にありとく度々御親父平八郎どのへも御頼みせ
ど今に何等の返答なく吾等も甚と當惑とあり居るに此處にて和女と直々約束致すの何よ
りも確と幸ひく愛に銚子杯蓋もわれ内祝言の夫婦の契約コレも何も其様に驚ふ事にあ
い是非とも和女が飲さして身共へ献てさへ看れば看るほど美しい此愛敬の堪らざいと評が
はしき舉動にも及び兼おん景状あるゆゑ連れの女の胸安らさるる邸へ報知んと歸るもわれ
但徒らに心を痛める者もあり況てや捉へられし娘の宛然氣も魂ひも身に添とせ免一玉へと
泣叫ぶのひ此折里見多門の住職の居室にありて斯る嘆きの聲も知らねと常より雑踏が餘り
劇しければ興に乗じて花など折る醉客のあるも測られぬ御さばやと思ふ儘何心なく地内
へ赴き見ると這の如何も一個の武士が而も抜刀を傍に置き杖を執り娘と捉らへ戯れぬるを見
認め悪き暴客の舉動かおんぞ惚めて呉れんと側へ立寄り大聲よて何國の誰のの知らねと
先佛和の庭へ入りあがり婦人を捉らへ打興するは以ての外あり殊もい漫に抜刀をすとの兩

刀を帯びながらも武士の作法さへ知らぬ似せものゝ疾々此を去らぬよ於て引揃んで堀り
出さすそと烈しき權幕了得の暴客も打駭さしが弱身を見せじと故と威丈高ふありて眼と
瞋しヤア推参あり下主下郎武士よ向つて失敬ある共過言今一言云つて見よ腮を切刻呉れん
すと脅しのくれは阿々と打笑ひ汝等の様者を武士と思と、田樂の首武士あり左様を噓言
を吐のんより無事返れと云ひ反せば該暴客はますます憤り最う了簡が相成らぬと切つて
寛れば身を外し苦もさく利腕緊と把る無双の力は暴客の心大いよ駭きて振放さんと焦る所
を首筋掴んで曳イヤつと聲をのけつ、自分の腰を開くと見る間忽ちよ該武士の四五間先を
る鐘樓堂の傍へ投つけられ額と腰を強の打てど手練に恐れと慢さし事ゆゑ痛さと堪へ起わ
がりて刀を鞘にをさむる間もさく抜刀を杖に遣げ行し最と心地よき事ありけり此際娘
の連れの傍に來り塵打拂ひ乱されし衣紋を正し居る處へ多門が進み來るを見て年長ある
婦人の小腰を屈め御覽の如く婦人連の場席へ乱暴人に飛び込まれ殊にの妾が誘ひ來りし
隣家の娘公が只今の災難万一怪我でもありし時如何おさんと案じをりしに測らす郎公が
御出下され小氣味よく追ひ拂つて下さりましよの地獄で佛とやしませうか實にお禮の口に

やし尽されませぬ孰れ郎へ歸りしうへ此娘の親公にやし聞かせ更めてお禮に參上致します
るが失敬ながら郎公様へ何處の何んと仰せらるゝか方にて御座りますると問とれて多門の
打笑ひ何んのく是程の事に禮の何んのと其様な事に及びませうの吾等の先頃より當寺に
寄食する桑門なり以後乱暴を致さぬ様態しやつゝる事なれば敢て貴女等耳に尽せしと云ふ
にのわらず其斟酌の入りぬ事切角の觀樂中花に嵐の雜風景にして無や心と痛み玉とん未と
日も高し緩々と眺め玉へと云ひ捨てて庫裏の方へと入る跡に婦女連れの内亦も障りのなき間に
今日ハ歸宅をせしと足を速めて立歸りぬ抑も當時暴人の爲に捉へられし娘ハ翠母藩士岩
槻平八郎の長女お時にして未と太田清九郎方へ嫁せざる以前なるが今日災難の云々と父母
へ具々語しゆゑ平八郎ハ太く駭き开の易のらぬ事までありし爾るよても其方が余が長女と
存じとるのみの嫁は呉れよと云ひ込みある杯とやすのらハ其暴人ハ必的家中の者なるべ
し娘ハ從來其者と見識りし事のあるや奈何と問へどお時ハ一度ごも逢ひ見し人ハのわ
らざりとの答へよ父母ハ不審晴れねど且其詮議の後よし長女が難儀を救ひ呉られし同寺
ハ寄食の其桑門ハ面會と遂げ恩儀を謝さんと直様興教寺よ來り本日云々の事ありし節婦

人情の難儀と救助玉ひし桑門へ面謁致ししと云ひ入りの多門ハ早速出迎へ初對面の換
拶了りし後平八郎ハ辭を更め婦人共が立歸りし砌桑門なりとやせしゆゑ僧侶の御身と存せ
しが見れば骨柄卑しので適晴一個の大丈夫失禮ながら何方の御浪人と存するなり今日
娘ハ危急に臨み該暴人と取控玉ひし御技倆承せとつゝ感佩致せり苦のらすハ御姓名を
まず明させ玉へるし斯ハ平八郎も兩人の俸ありと専ら修業致させとれば武藝の優し人と聞
く時ハ如何にも慕としく存するなり何卒當地に滞留ありと御指南のらハ國の侍御隔心な
く御物語下されし御世話ハ娘ハ危急を救ひ玉とりし御禮に聊の報ふ所存なりと最と打
解する平八郎の辭に多門ハ打頬笑み高の知れる醉客と打懸せしとく過分なる其御挨拶ハ
恐縮せり元來小可ハ相州の産幼年より江戸へ出で些少武藝の學ひしので中々指南致すな
どの術ある者ハ候はず殊ハ近年仔細あつと腰帯せし兩刀と棄て身を雲水の定めなく
浮世の旅へ出でるのらハ素より仕官の望もなく法師ハ齊一小可なれば別ハ御談事ヤせな
どの業ある者ハ候はずと辭退にいよく平八郎ハ最と奥床しく思とれと膝の進むを打忘
れ顔に我家へ來ららん事を望みする其深切に里見多門ハ只得一旦承諾の趣きを答しうハ平

八郎の深く欣び立歸りて此様子を家内の者にも吩聞のせ乾淨房を同人の寓居に充て多門の
 來るを待ちぬり候て多門の亦平八郎が切なる辞の逐一を仕職へ話しに是れも大に打欣
 び岩槻の目下藩守の寵臣なれば身を寄せらるゝとも決して御身の爲に惡のるまじ心に染ま
 ず何時にも立歸るゝ最と易き事なり左右彼れが望にまかせ玉へと勤められて稍くに決
 心なして當日より岩槻の邸へ引移りしに平八郎の早速妻を始め長男平太郎二男傳十郎を紹
 介せ此嫡男の拙者が從弟勢州津藩村山徳右衛門の相續人にて來春の同地へ遣はさるゝ亦二
 男傳十郎の即ち拙者の家督相續人未だ弱冠のうへ長師とてもあらざれば文武の道にの最も
 聞し何卒今よりしての充分に御教諭のほど願ふと父子俱々切なる願ひに多門の席を更めて
 御息女の危難を救ひしのみにて宛て功なき小可を斯ばかり深き御待遇殊よの兩賢息へ武術
 の教授を致すべしと分外なる其御辞實の小可所存ありて當地は長く足を停めぬが今日當家
 へ参願せしうへ事情をお話しして後出立せんと存せしあるが只今の如き御懇切の厚意は昔
 くも何とやら餘り無禮事なれば今ぞ包まざる吾素性を御話して御委囑の如く不省ながらも兩
 賢息へ教授の楷梯仕つらんと是より其身の相州小田原藩里見小左衛門の弟ありしが簡様々



の失策ありて不心得よも國遠せし事より小左衛門が切腹自身が發心の有枝有葉を詳細語り
て再いふ様態る素性よて候之ハ復度主取の仕つら亦兩刀の帯とまじと心よ誓ひをりる
ゆる然るうへよ文武の道を學ぶの益なき事ありと今日までハ放擲して打忘れしよも齊一
けれハ御意授けの思つかされど熟練をせし道の一手二手と御傳授すべしと云ふよ父子の歡
びて翌日よりして兄弟の多門ハ屬きて専ら武術と研み居り別分説平八郎の妻お國の實家
の同郡宮口村の大照院不典と謂へる山傳あるがお國の兄不典が没去する後の跡目と相續せ
る者とてもおかけと當院ハ領主の深く御信仰ある家柄なれば何卒娘お濱(お國の妹)は婿を
迎へ家名を繼がせんものと心懸け居られと相應じき縁談とてもおきまよハ空しく鳥鬼を
過し居るが平八郎ハ熟々念願らと多門ハ武士と棄て生涯出家ともあらん決心ありと語
りしされハ何卒して彼れをお濱の婿とあし長く此地ハ足を停めさせんと妻お國へも此事を
語りしよ夫れを願ふてもおき僥倖され如何なる事よや妹お濱ハ未だ夫とて定まる者なく仇
よ過ぎ行く其うちよ父母よ別れまよ兄よ別かれ便宜なき身となりよゆるお妻も情願好ま婿
を迎えて安堵せんものと日夜よ心懸りなりし宜ふ如く多門大人が承知をなして下さらば此

上もなき妹が僥倖妾が欣び是非よ得心あるやうよ勤め玉へと賛成する辞よ平八郎ハ打點頭
或夜多門と一室よ聘き盡の勞を慰むる酒肴と列べ何よくれと古の英雄談を論じ亦ハ近
時の劍客を評し互ハ隔意なく語合しが多門ハ堅く禁酒の事なれば但其席よ坐し下物と荒す
のみ此時平八郎ハ手よ持し硝子皿をやをら下よ置き容体を更め多門よ向ひ近頃すあぐるも
甚ど如何の譯よて御座候ふが先頃より種々御持論も承まはりしよ如何なる事のありとても
復度仕官の望みなしと思ひ斷つる御辞ハ全く忠義孝道と全うせん御所存と猜ししやせ
バ小可も但感嘆の外ハなく仕官の儀ハ付決してお勤めハやわけせ然るよ爰よ一ツ御相談
りトヤすハ餘の儀ハ候ハねど是より妻と協議せしお濱の婿となり大照院の家名相續と
し下されまじきやと述べらるよ最初のはどの容易承諾せざりしかど多門も心よ思ふやう修
験と云へば行者よして異相のすれど佛家の流れ吾今より出家とあり勉勵とするとして志望を
達するまでハ中々容易からせ夫れよりの寧修験の後目を相續すること良策なれと竟ハ大照
院の入婿とならん事を承諾せざりしゆる平八郎夫婦の悦び大方ならず早速宮口村へ使を走
せてお濱を招寄せ此趣きを吩聞かせ多門よ見逢ひとさせしよ元來お濱ハ國色の聞え高き者

なれば其嬋娟たる粧ひしの何よ比ふべきものとしてなく最と愧入りたる風情にて斜目よ多門の顔と打眺め報らむ顔の夕日さす紅葉よ齊一愛らしさ多門も須臾の恍惚と物さへ云はで居ふりしが心の裏にて思ふやう如何なれば且此美人が今まで寡婦にてありしやらん假令其身の謹しむとも世の浮連男が肯でか其まゝと爲し置くべきか爾れとも今の品行の亦生娘かと思ふばかり左右該家の婿となり身の落着を定むるゝ如かずと雖て吉辰を選ひ更めて大照院の婿となりし嘉永四年の七月上旬なり一恚て夫婦中も最と睦まじく多門八名を其儘大照院多門と喚び専ら修験の道と研究し傍ら平太郎兄弟へ武術と教授居りしが翌嘉永五年二月中旬平太郎の約の如く勢州安濃津なる村山徳右衛門方の迎ひに應じ養家へ出立の期も隠みしかば父の覺悟の前ながら有驚も餘波惜まれて必老とも忠孝の道を忘れて未代も名を汚すとあるべからせと呉々教訓せしころうへ多門も暇乞させ着つゝ馴れまじし翠母を後よ神風ぞ吹く伊勢國安濃津を投て啓行けり斯て後長女おとさの同藩太田清九郎方へ嫁しが程なく平八郎の女子を擧げ之をとお菊と名け都合二男四女の内一男一女の既でよ他よ赴き今の一男三女と寝きひ居り寢るや光陰の矢よりも疾く隙行駒の足掻き速き茲も四年と打齒

して安政二年の春を迎へぬ爾るほど大照院多門の近年に至りて追々檀家の信用と得且の石巻山我眞流の達人おきば多くの門弟も出来先生く人と敬慕ひ何不足なき身とありしより昔日の志操の頼も變じて元の懶惰生となり生涯を誓ひし禁酒も早晚破き時々の人を打擲し隣村を暴き廻り乱行日増し募りしゆる妻お濱の深く之れと憂ひ姉の許へ聞こえて宜ろ一かるまじと度々意見を加ふれども但馬耳東風と聞流し強て誅め禁むる時の手書り次第も打擲おすよぞお濱の最を悲しみの涙に乾く袖よあけれど酒さへ飲まねば別に難りし事もあきゆる只良人の酒量の減するやうよと果敢あき事を神佛へ頼むる妻の真心あり岩槻平八郎も多門が酒癖より亂行の舉動ある事を仄に聞き識り潜し心を痛めつゝ渠初め酒より一之身の浮沈を惹起し終に兄を死に至らしめ一を以て堅く禁酒をせしと斷言おしむふりしは世俗に聞はゆる咽喉元過ぎく熱サを忘るゝやら最と歎きべき事あれかし爾りながら吾も一旦妻の妹に配偶させし上から用ひぬまでも諫言せんと或日多門を潜し招き先ごろより度々小可の耳朶よ觸るゝと雖も些細な事と意もせせ口へも出さざる候えども今日御殿よ於て重役の者より足下が妻の妹婿ある大照院多門と云へるの平常道徳堅固の聞こえわれ

ど酒を嗜好る癖ありて飲めば忽ち其身を飲れ行者の身よくあるまじき舉動多しと聞えられ
ハ屹度足下より同人へ説諭われよと厚意の辞面目を失し立歸りしが始めと世人の噂ありし
ハ嘘言をらすと嘆息せり先年娘の危難をバ救助られたる其時より愚息へ教諭の思もあり殊
よハ妻の妹智縁を繋ぎのるうへらの善惡俱に貫下評ハ心よ注め配慮せり人とし生れ世
の中よ好める物のあつくハ協はず決し酒を廢られよとの言さねバ以後謹みて口善惡をさ
里童子の嘲笑を防ぎ玉へと仁惠ある平八郎が諛言ハ酒の氣をけれバ大照院ハ深く其非を悔
悟しく向後斷然改心をし高輪ハ酬ひ奉つらんと愀然として立歸りしが夫れより凡一月餘り
ハ堅固ハ修法を執行し積く人の沙汰も敬みお積も潜ハ欣びをりし頃ハ安政二年二月十日
多門ハ舉母の町よ出で岩槻へ訪れんとまゝの途よて同派の某甲と云るハ面會せし久々
れバ飲ながら酒の坐の相人よあるハ苦かるまじ手餐を喫て行べと強て連られ只得も近
邊りの簀亭よ入り暫時あるうち隣室よハ四五人の仲間らしき者が酒酌替し稍閑はまありし
と見得隣隣搦と高聲よて吾が主人の噂話しハ譏譽褒貶と口から出任せ中よも一個の仲間
が巻舌ながら説出す仔細ハ開も亦甚麼ぞや且結構の和解ハ甚ん次回ハ分解とると俟べし

○ 人松島よ遊女の應接
樽高樓よ幼子の復讐

月窓一夕譚

彩霞園柳香稿

第三節

句お互ひよ斯う睡まじく酒を飲んでこそ娛樂あれ乃公ハ隣邸の岩槻様の親類で宮口村の
修験者大照院ハ大酒院と渾名を稱るハ飲助だら毎も岩槻様で大嘆息サ一體那の男ハ元東
國の大名の家來で居ハ酒ゆゑ國ををられなくなり脱走して此國へ來ハのを慈悲深い岩
槻様が引取つて世話をさされハ其うへにて修新造の妹公で美人と土地ハ評判のお濱さまの
婿とさされ今でハ何ハ不足のさき身分とありし修恩を忘れ復もハ酒の爲ハ岩槻様へ大
迷惑を掛け佛の顔も三度とい能く人口よ云ふ事だハ大照院ハ三度所ハ四度五度の失策も堪
忍強ハ旦那ゆゑ今まで其まよ死して置れハ今度ハいよハ離縁とさせ他くら養子ハ來
るとの事よて亦何程うハ有りつけると可内ハ潜ハ乃公への誦説那の大酒院も旨加減ハ酒を
廣めて實体ハすれハ修験者ハ似合ハ美人と配ハ居られやうもの是れを思ハバ世の中
ハ樂しむ酒亦苦しむもさけハ自由ハあらぬものと善惡ハ下郎ハ陰の噂を隣の一

室は洩れ聞く多門の眞箇と思へば心の裏は以ての外立腹し殊より同伴の手前もあれは直ぐ
は下郎を引提へ詮議をせんと思ひしりと亦熟々と顧慮ふ之れと謂へるも常平生吾不行跡
は據るあれは誰をの憎み誰をの怨みん今の下郎が一言の亦乃公への金針ならんと深く心は
恥るものから當日の直に立歸りしが翌日岩槻方より少し今日の來客ありて多忙ければ何卒
お濱を貸與へられよとの使ひあるゆゑ多門の妻は此由を吩聞けせ岩槻方へ赴きせしは同家
よての久々よてお濱の來よりし事あればとて翌日空の曇りしを機會は同家へ引止め歸さ
るよぞお濱もまゝ久々よて姉お逢ひ看る事あれば二日三日と滞留して無沙汰お吾家へ歸へ
らざるより世俗は云へる疑心暗鬼とのや多門は獨り不在居してお濱の歸宅せざるを勘考る
よ設も此はどの下部等が云ひし如く酒癖れ吾れは愛想を盡し姉々婿等と謀合せ此多門を離
別せんとの協議よてのあらざるうと思ひ立てり倒に矢楯も堪らず吾家を立出で迎ひ旁々
岩槻の邸へ赴き看ると今日じもお濱の姉ともは同國の一の宮なる八幡宮へ參詣せんと立
ち出でし後あるが家内の者の此事明白に告げて苦しうらぬを奈何思ひしうは新造様の今朝
早くお歸宅遊ばされしと云ひるゆる多門の最と不審お思ひ吾儕の今朝より家も在りて

今しも出向さしづりあるよ歸宅せしとあるお濱の途中よての面會せざりしあり然し他
は道寄りを致せしもの側り難ければ其れは且宜いとして兄公の傍機嫌を親に行うんと云ふ
に旦那様の未だお退遊ばされすと云ふ然らば姉上の御目よかゝらんと述べしは奥様の今
朝方よりお寺へお參詣遊ばされましと答ふる様子の何とやら不審お思ふ事のみあれば再
こそいよ〜姉妹謀り吾れを離縁の協議なるべしと一途は決せし短慮の多門憤然として疊
障りも最とあらしく立歸れと未だお濱の歸宅をせざれば心の裏は怒を發し姉女子の薄
情の云ふも足らねど但惡くさの平八郎なり吾一旦佛門に入らんとまで決心をまたりし
は娘が危難を救ひたる恩儀を報ずる爲めありとて吾より望まぬ修験の身とあし現在妻の妹
あるお濱の婿とあしあがら今にあつて酒癖を難は離別せんとは奇ッ怪至極縦々爾る心庭を
れば吾れも聊の所存ありと然らぬ事を然思ひ獨り尋思は暮れりくる門の戸開けて立歸り
しお濱の姿を看るよりも吾家を棄て五日六日何處も遊びてをりしのと云はれてお濱の不審
のはれず貴郎はお暇を貰ふてより姉さまのお邸へ參じ二日三日と滞留せしは妾が不都合爾
れども決して他所あどに參りし事はお座りませぬと分疏するはと尙話説の筋道たゞぬ包し

立ては多門の深く激怒のまたれを故と面を和らげて當夜の何気なき体にて枕を列べ臥したりしが翌日の午前多門の衣服を更めて平八郎の邸へ赴きしは當日お國の太田清九郎の家に至りて不在なれを平八郎の在宿せしゆゑ一室を請じ入れたるは多門の容体を正して道へ様今日吾儕の推参せし昔日の里見多門は立復り岩槻氏へ一議論試みずさん爲ありと辞尖さ体爲平八郎の打煩笑み這の毎もあき多門氏を舉動如何なる議論のあるの知らねを親類中にて肩胛張つてのや分との心得難しと道へは多門の膝を勤め其れ其如く親類中の義理人情を思はるゝあらは吾れも過ちある時に諭し教へて玉はりてこそ寔の親類とも謂ふべけれ爾るを吾が酒癖の質あるを倦み離縁させんとを目論見の抑も武士よあるまじき業あらずや元來吾儕の酒の爲め一旦國遠なせし身のうへ堅く禁酒を守りしうご一朝亦も僅みを破り不都合を醸せしゆゑ先づ呉々高論ありて當時よりして吾れも亦一層堅固よある事定めて了知あるべき咎夫れも以前の義理を失し離縁をせんととの協議ある由吾儕儘承知をきたり爾るよよつて今日の吾儕より離縁の事をや出づる貴殿も武士あり速りに承知われよと云ひ出でる多門の辞ふ平八郎の愈々不審晴れねども尙更餘りお答ふるやう今其許の一言の

一切吾等其意を得ず如何ある事を聞き辨め吾心よもあらぬ事を云はるゝもの哉離縁を致すの所存あらば何條先頃の如く浮説論をやさんや善悪あき者の口を眞個とせらるゝも根が正直の心よりあるべし努々然る事ありあるまじきと云へど多門の倒肯の事果の散々平八郎を悪口おして止まざるゆゑ岩槻も立腹おし斯まで事實を辨明しても不承知あらば是非もあし此うへの貴殿の隨意は離縁をするとも立退るとも吾儕の更も搦ひおしと老の一徹平八郎が怒の体を見るよりも多門の急ち氣色を變へ能くこそ云つたれ平八郎恩を忘れて義理人情を思はぬ汝が素頭よの里見多門が與ふる物あり離縁のまゐるしお之れを受けよと側置いたる匕首を抜く手も見せず岩槻が肩先深く研りつくる手練の切先何の堪らん乳の邊までも切り下げられアツと後へ倒れはまたれを此方も了得ぬ氣丈の老人起上つて床の間ある刀を把らんとする處を多門は直ぐお附け入つて復度脾腹を刺徹せし無念と焦れどあまよみの甲斐なく其首も息絶し最とも無惨の横死あり多門の憤怒お乘しつゝ平八郎を殺害せしは當日の朝より春雨の軒うつ音の高くして斯る噪きを知る者としてあく殊も再助と云ふ一個の老僕あれと是れのお國を迎ひの爲め小兒を連れて太田方へ赴きおれば人のをらぬを幸ひと多

門の爰こゝ悪心あくしん増長ぞうちやうし小篋こたんずの抽斗ひきたしより若干じやくかんの金きんを奪うばひ何氣なにげなき体ていふて宮口みやぐち村へと投歸なげかへりぬ
 斯かるべしとの露つゆ知らぬお國くにの小兒こども們と吾助ごすけを連れ太田おしたを出だで歸かへり來きたる其途そのち次つぎも何なにもと
 かく胸むね噪さわぎして易やすうらね脚あしを速はやめて我家わがやの軒のき挿さしたる傘かさをすぼめながらも吾夫わがつとこ只今いま戻かへり
 ました爺おやさん姉あねさんよ是これを貰もらひましたよと廻まらぬ舌したよ乙娘おとめが告つぐれと奥おくよて返かへりのなき
 の涉せつ臥ふあつていも涉せつ座ざるうと開あく障子しょうじの内うちわの仕生しつかよ血あけよ染そみつ、平八郎へいぱちらうが倒たれて其處そこお
 死しし居ゐたればお國くにの餘あまりの駭おそさよものさへ得い云いはで死し骸がいお縋すがり思おもはずワツと大聲おほこゑわけし緯こ
 の様子ようすの知らざれど吾助ごすけの吃驚びっくり駭おそつつけ看みるよ此こゝ体ていあるゆる仰おほ天てんし這この何なに者ものが旦那だんな様さまを之これ
 の如何いかよと辞ことばさへ呆あれ果はたる計はかりあり歎なげの中なかよも妻つまお國くにの長押ながしの薙刀なぎた追おッ把につて鞘さやを拂はつ
 て駈行かけゆりんとする袖そでを握にぎりて吾助ごすけの禁こゝろめ奥様おくさま貴女あなたの急相きつそう變かへて何處いづこへお出いでさされますと問と
 へばお國くにの涙なみだながら何處いづこへとい知しれた事こと知しれぬまでも後あとを追お追お蒐お所ところ夫つとこの仇あだを報はらする覺かく期どと
 云いふよ吾助ごすけも涙なみだを拭ぬぐひ其思そのおぼしめし召よひ涉せつ有あ理りで座ざりますが誰たれの所ところ爲なしと知しれぬ前まへよ逸はまつた事こと遊あそ
 ばしての反かへつて涉家せつかの物もの笑わらひ左右さゆう多門たもん様さまや太田おした様さまとも涉せつ協きやう議ぎのうへ仇あだを腕うでと突つ留とどめて其後そのあと
 旦那だんなの涉せつ怨うらみをば散ちらさるるも遅おそくはあらじ且ま々ま々ま涉せつ心こゝろをお鎮つめささりませと云いはれてお國くにも



稍くは思ひ違まつて死骸の傍も顔も得仰げで泣居たり吾助の亦精悍しく人を雇ひて宮口村の多門方と太田清九郎へ至急の大事候へ直に参詣を願ふと言遣りし太田の駭き多門の亦心に夫れと疾よの知れど故と不審の面色しつ俱に岩槻方へ來たり見るとお國吾助の涙あから平八郎が横死の様子を語りしむぞ太田の愕然として但辯なき就中多門は突と起つて死骸を驚と撿めあから初太刀は肩先を切りしと思しく脾腹を刺して止めとせし尋常の者の所爲ならず然りあから箆笥を開き金銭を奪ひ去りしとあるうらの正しく盜賊の所爲あるべし如何ある勇士猛將も不意を撃れて不覺と享けし古今往々ある事あから如何も本意あから此後最期餘りの事涙も出でず姉公の傍心中参察しゆせども今更欺き玉ふとも詮あき事あて候へば後々の計ひこそ肝要なれ爾の思はれずや吉田氏と打交れつ云ひ述べられ清九郎も黙然腕又きし顔を仰げ寔や千万年の鶴龜にも輪ひの限りあるものあり壯さの老て終り行く道とい云へば鼻殿の斯る横死の思ひさや但此うへに伊勢の義國殿江戸詰の傳十郎殿の許へ急報を以て告やらんと聽て藩廳へのお國より平八郎變死の趣きを届け出で檢視も濟みて稍うと袖は涙の野邊送り有縁が茲に集ひての愁嘆の看客宜しく推察なれ爾れ大

照院多門の首尾よく平八郎の横死を盜賊の所爲ありと欺き課せ造化精妙と心中は打歎ひのまたれど亦熱々と願慮すお平八郎を討つたる後何となく女房が濱が吾の舉動を探る様子自然殺害の事を嗅出たしたるよりあらざるう爾わらば此儘辻架く配偶をらば竟はの露顯せんも知れ難し世俗は云ふ毒を啖はば皿までとやら軍手短く切害するお如くせとお漢に向ひお國より急用ありて面會致たしとの傳言ありたれば早々参るべしと出だしやり其身の後より微行し尾け行き宮口村を距る野田川と云へる堤おいて無慘にも唯一刀は切殺し死骸を川の中へ蹴込み宮口村へと立歸かしうへ些少の金銭其他の品よて手輕の東西の引摺へ一被布は包み腰に括り今一仕事爲て行のんと學母は來り岩槻の邸へ忍び入たるの既に三更過たる頃あり常は勝手と知つたる事あり座敷に入りて看渡すお未亡人のお國の要事と思ひ勞れて寐入りし傍は今年六歳の二女お春がスヤク熟眠おししを見濟し袂索つて手拭把り出し手疾く脚の猿轡あさけ用捨も驚掴み小脇を抱き立去りしを能く寐入りし時なるうお國の素より老僕吾助も更お心の注ぐざりしが翌朝は至りお春のをらざるよ打駭き甲よ乙よと探索あす折のら宮口村の農民が遠だしく來りて道ふ様今朝野田川の堤を通り越りしは當家の

傍親類なる大照院の傍新造お濱さまを惨酷しく切殺し川中へ死骸を投げ込みありしゆゑ早速此趣きを法印様へ申上ると大照院へ至りて見れば座敷の種々取散しおれど何う探しても法印様の傍出でござれず其れゆゑ目得お濱さまの死骸は其まゝとして取敢ず傍注進より参りましたと所くお駈く姉お國其れのみ個う情なや娘の行方知れぬ折うら亦もや妹が解る横死の夢の現うコハ仕生と須臾の辞もあがりしが解るにても多門殿のそらざることを不審され急ぎ吾助駈つけて動靜を篤と索り來よと千々又亂るゝ心のうち推量るさへ哀あり折うら父が計音を聞き養父よ乞ふて暇を貰ひ伊勢路を立つたる平太郎義國の夜を日お繼ぎて當日實家へ着せしゆゑお國の歡び大方あらず語るも涙より外は辞もあらざりし平太郎の相打曇る涙を拂ふて母お向ひ温厚篤實を以て人々識られ玉ひたる父上が开も此度の凶變の實よ案外千萬あり夫れのみあらず時宵お至り叔母公の横死妹が行方殊に叔母婿大照院が逐電おせし一切以て分點のゆりざる事よこそ篤と實否を亂せしうへ江戸表より傳八郎の歸宅を待つて供々俱不戴天の父の仇やとの散さで置ませうくと無念の涙兩眼よ止め兼たる孝子の一心お國も最と頼母しく其一言こそ千部万部の讀經よ増さりし父公へ手向其れ

よつけても宮口村の動靜を疾く聞き度ものと云ふ折のらお立歸る吾助の喘ぎくお國お向ひ奥様敵の知れましたが世に情あり事で傍座りますと動と倒れて泣入る吾助の辞を聞き平太郎の刀を把つて膝立直し句コリヤ〜吾助而て其仇の何者あるう句爾れば仇の大照院の多門様よて傍座りますと云ふる母子の復讐驚句々、多門殿が父上を切害せしと心得ず其れおの何り証據ありやと問はれて吾助の涙を拂ひ句証據とや此錫杖只計りよての傍分明なるまい且一通りお聞き下さい先刻おはま様が傍最期の報知ゆゑ彼百性どもお赴き取調しよ成はど無慘の傍落命亦大照院の傍家の動靜と取調しよ全く家財の目星も物を引擧つて逐電おされしお相違あり亦昨夜同村の大森彦十郎様の仲間松藏が當地の内藤監物様方へ傍用にて参り此お邸前を通り苑りし折うら小兒を小脇お抱へたる怪しき男に出合しゆゑ行違ひさせ提灯の明りに顔を見んとせし時其れと知つたの曲者が投附たる此錫杖思はず明を消たるにぞ餘儀なく曲者の取逃がしたれと手お残つたる錫杖よ大照院と鑄在の子細おらんと其筋へ訴へやうと思つた折柄後の証據よもあるべしと松藏より受取りましたが是れよ依つて考へ見れば且那樣を始めおはま様を殺し亦お春さまを奪去りし那の狸山

伏の大照院多門が所傳で浮座りますると一伍一什の物語始終を聴居る平太郎の髪逆立て眼を瞋し極悪人の里見多門恩義を忘れ父を手懸け金銭を奪取る耳からす現在の妻を殺し義理ある姪を掠め行く言語を絶せし大逆無道假令空飛ぶ翼あり地を潜るの毛爪ありとも索出さで置くべきかはと齒を噛切はらくと口惜涙を暮れるたり斯る折うら太田夫婦も入來たり是よりお濱の死骸を引取り法の如く葬送し二男と云へと相續人の傳八郎が歸國を待むたる處へ父が横死の報知を聞くより浮暇を乞て江戸表を出立おしたる岩槻傳八郎の早籠を以て翠母へ到着せしり同年三月上旬おして母子兄妹打寄りて盡ぬ涙の袖襟乾く問とての有さりしが義國兄弟の亡父と叔母の墓を詣で今も浮無念を散させやべしと口も出さねど真心の表れて最と頼母し、恚て兄弟の孰れも三ヶ年浮暇の儘を銘々の主君へ願出せしお濱はりあく聞濟とあり若干の金子亦り浮書等も頂戴せし故其恩命を違く拜し母に向ひての浮身を太切お吉左右を浮待下さるべしと盡ぬ餘時の暇乞是非浮供ふと老僕が切ある願ひ附る事あれと其方の只願母上の介抱おし進するが供お立しは優し忠義と制し禁めて得心させ再度何時を逢瀬とも定難おら旅ころも袖お降來る花吹空彌生の空お鳥が啼吾妻を目的に旅行けり

○人松島よ遊女の應援
樽高樓よ幼子の復讐

月窓一夕譚

彩霞園柳香稿

第四節

此處の中仙道深谷驛の盡頭を軒傾さし辻堂の椽も憩ふ一個の盲目手曳お運れたる十一二の娘の脊中を摩りおがら。今日の雨のぐりの故り大分道が悪いゆゑ和女も嘸草臥とであらう晩にの好お汁粉餅を澤山喫させてやりませう併し徐々行かうりと立上りて熱湯交り歩行向ふへ二三個宛も暴漢雲助們が兩個の行く途と遮りて 甲何程盲目滅法界は場所構はぬと云ひおがら乙吾儕々此も居るのも知らぬ諸交りお通るうらと 丙堅度酒代を出す積りだらう三人懷裏おある握飯お添へた澤庵の山吹色胴巻ぐるみ出すがいと云れて座頭お打駭さ。ア、モン、何方様のの存トませぬが浮覽の通り盲目ゆゑツイ失禮も口癖お小謔を便りに歩行ましるの平お浮陪詫の致しますれと旅うら旅への稼人山吹色とか云ふ品を所持してゐる様お座頭での浮座りませぬのら何卒浮免おされて下さいませと慥ひおがらに分疏おせお強肯聽りの雲助們は目お角立てて聲おわらく。斯う盲目能く聞け、吾儕のち年中此首邊に

眼張て往來の者の懷裏何程と相場を着る日にやア從來銀錢一文でも問違子の無エ雲助様
手前が京都へ官を受けよ上る相場は確は百兩まゝ旅費の廿兩許々吐き渡しておめへ
と右左より立苑り慈悲容赦もあらくしく座頭の袷引提へ打搦すを傍見見る娘の堪
らすアレヨくと駈隔て泣喚を蹴倒しあから既小盲人の懷中へ手を差入て胴巻を引出さ
んとする折りら恰好側らの辻堂の中より立顯れし一個の男が座頭の前より立塞がりし該曲
漢が特鼻禪を把るよと見えしが曳平と懸聲遙彼方へ投げ出たせば不意に駭き残りの兩個と
小積お奴メと組境るを生意氣するかと左右の手にて首筋楚と引搦み宛然手輪を扱ふ如く顔
と頬を丁々々々コリヤ堪らぬと曲漢們の巳が名よ呼ぶ蜘蛛の子を散すが如く逃げ去りし後打
視該男の座頭親子を劬りきづら「何處のお人う知らさいが飛でもあゝ災難又遭おすつゝ然
し惡漢の追ひ散しましうら最う案じる事の有ませんコレ娘公吾が来らうら怖くいな
レお爺さんの手お血がついてゐる大方疵を附けられるのであらう早く拭ておげおと道
ふうちお彼盲目の聲を知べよ頭を下げ「誰方様うの存トませぬが私し桶川驛の徳平とや
す按摩でござります今般京都へ官をうけお上りまするゆゑ此をとりまする娘お雪と手曳

よして出苑ました途中不圖只今の災難おて何うある事うと思ひましたよ郎公様がお救け下
され何んとお禮をませうやら有がな事で汚座りますと頭を大地へつけ春ふ体よ該男の
打笑ひ「ア、コレ」其様お禮を云つしやるおも及ばぬ私も其方と同一家業の太田多市と
云ふ信州松本在の按摩よて肩腰按んで渡世ますれど其方と違ひ眼が見ゆるゆゑ不自由とて
あく國々を昨日の奥州今日の出羽と巡りく一昨日のら此深谷驛は滞留して昨夜の餘り
お稼ぎ過ぎた故の先刻爰邊へ廻つて来ると眠くて堪らぬのでツイトロくと辻堂の内
よ一睡してゐる折りら何んだの喧々云ふお驚き眼覺めて看れば盲人と小兒と思ひ雲助們が
手暴な事をする動静ゆゑ飛込んで追つ散したまで其の禮おひ及びませぬ然してお前の今夜
何處へ泊る積です「ハイ最少し先まで出のけやうどの存じましたか唯今の噪ぎで何んだら
氣味が悪う汚座りますのら今日の早泊りよ此深谷で泊りませう「オ、夫れがよい」深谷
泊なら幸ひ吾の居る木賃宿是らうら向へ四五丁餘り田形屋と云ふの倒深切お家ですが何
んから一緒お泊なさいと云はれて徳平の打喜び貴公様汚出での家あら私しも安心を致
します其れで汚迷惑おがら汚連れなされて下さりませと頼めば多市の頷いて聴て父娘

を打連れ立ち田形屋お歸り來り最と深切お何ふくれと劬りあがら今日の次第を合宿の者も
 も話し實ふ道中筋の聖助們お決して油斷がなりませぬと語れば聽居る泊客も父子が恙
 なきを喜び枝のら枝へ咲出す話説ふ打興じ夜の更るをも知らざりしがお雪が頻ふ居眠りの
 動止を看るより一同のサア／＼寐やうと各隨意其首邊へころりと木枕の最と氣散じは横お
 むれば晝の勞れり忽ち又駟の聲のみ聞こえ駟り登時多市の合宿の客が寐就きをうのゝひて
 密と起上り偷足躡足手搜りあがら徳平の枕邊近くへ忍び寄り緊と寐る時着て置いた布團の
 下此首邊と右手さし入れて引出だす徳平が官金を納し胴巻あり多市の裏より取り出す
 金の吾が懷裏へ潜しをさめ袂探つて一角の鉛細工のねてより調製置しものあるべく开を
 胴巻の中へ入れ舊の如くお布團の下へ造化精妙と獨り笑み復度吾が臥度お戻り空貯して寐
 入りしどの何んも白川夜船漕ぐ昔よりも未だ驚しき客も雀鴉が軒へ啼く聲も駭き起さ出
 づれば徳平父子も眼覺して布團の下の胴巻の早晩中の變りしと素より心注ぐされ其ま
 楚と肌お結つけ小出しの財囊の紐解きて木賃の代を拂ひ完了多市お向ひて辞をうけ一偕て
 信州の多市様昨日よりの百般とお世話に預り添けあう御座ります私ハ是より京都へ向け

武藏國深谷驛



て上ります。貴方の暫時當地は滞留で座ります。と問へば多市の首を傾け左様サ吾儕も今二三日當地よどの思ひました。夕遽に勘考出し、事もありません。是より本庄の方へ出掛け江戸見物りさう。一稼して信州へ歸る積りあれば此處まで分れず。と昨日の似氣なく朝餐の箸をふるすと其まゝ忽卒ふ身準備をして立上りしが表へ出づると舌をペロリ頬笑みながら行きさしとい知らぬ父子も大々へ暇乞ひして熊谷の驛路を投して赴きけり。話頭復題義國兄弟の東海道を三島驛まで下りしが其途次も油斷なく心と注いで多門へ行方を索ね捜せど手懸りとしてなく其れより道を甲府に取り豫て出立の節吾助が物語幼年まで別れし同人の弟真助とやらんが中仙道熊谷驛に在りと聞けば設法用もあらば立寄らせ玉へと云ひ、る事あり然らば渠れを索て見ばやと程なく甲府を立つて同驛に來り只ある茶店お憩ひて須臾時をうつし居る其傍らよ之れも同じく旅人に見えて草鞋掛け幼女連れし盲人の座頭が腰を懸けたるの該徳平父子として最と愁然たる景状あるを平太郎の打睡遣り「甚だ卒爾お事を云ふやうなれど看れば盲人の旅中の様子あるが何り頻りお愁ひの体、設急病よても發せしう吾儕の聊り準備致せし藥もあれば苦しくらずに進らせん一河の流れ一樹の陰同じ

茶店お憩ひし他生の縁のある事あるべし仔細を語つて聞のされよと好意も籠る義國が辭を聞くより徳平の思はず潜然嘆きしが稍くは顔を仰げ「お辞の様子でいお武家様と存じまするも其其深切あるお尋ね任せ身の災難を一通りお聴なされて下さりませと彼深谷驛よ於て雲助は暴舉又出遭ひしより太田多市と云ふ同ト按摩渡世の者よ救はれ最と深切お働りて田形屋へ連れ込み一泊せしまでの有枝有葉を具小語り再も涙を拭ふて道々様「只今お話をやましなまでの其人の深切お所はありですが實に今も上げの通り私は遙々と京都へ官を受けお参る者も官金の百兩の胴巻を納れ肌身放さず其れ如何した都合やら其夜の放心と胴巻を布圍の下へ布いて臥せしが何時の間と盗み取られたり只今胴巻の中を此娘お探めさせしに重量の似されと中包の黄金ああらぬ鉛の替玉と听いて吃驚昨日今朝の体をバ娘に尋ね聴けば聞くほど不審の彼多市どの云ふ按摩と心の注けと後の祭り其れども他盗み人のあるやも知れずと思ふゆゑ設法りあき思人に悪名つけてのあらあいと想ひ返せと當惑に官をへ受る百兩を盗すまされしうへ京へも行けず長年辛苦で時へし其甲斐もあき盗難よ木うら落る狙同然何んと詮方なくばくり途方お整れてをりますると最と惘然ある物語

お兄弟顔を看合して貰ひ泣きして居りしが傳十郎の膝をすくめ「听けば聞く程氣の毒ある禍害ふこそ遭遇され吾儕の諸國を巡る者も設其多市とやらを聞き得るの再の出會いこそ事のあるやも測られねば年齢格好を話し置のれよ心を注げて穿鑿し得させんと弟が辞お平太郎の座頭が連れさる娘は向ひ「コレ娘公然うして其按摩とやらの如何ある面体よてありつるう覺えあるだけ語るべしと腰ある墨斗を把り出せば娘お雪が一々又敏くも示す人相を平太郎の委ごとく認め了りて讀み下し尋思の体を信らお聞き居る弟も小首を傾け「石巻山我眞流の名人と聞く里見多門が豈夫按摩も致すまじと思へど只今聞き取り玉ひし其の人相の正しく渠が「如何も年齢と云ひ骨格あり寸分違ふ處のあし附りあがら世よ他人の空似と云ふ事往々ある儀あれは強ちよ夫れとの決し難しイヤ何と德平どのとやら而て其多市とかや按摩の何國へ参るとやをりしの聞き及むれに致されぬうと問へば德平打點頭「されば彼多市の江戸見物をしてぶら〜と信州路へ歸るとのやてをりましうが其れの嘘やら眞とやら其處まで知りませねど何んでも江戸へは出る覺期のやうよ聞き取りましうと始終の話は兄弟の夫れうあらぬう仇多門の似寄の者お逢ふる人お面會をすの幸先よしと心

の裡に喜ぶものうら父子の者ま打向ひ「吾儕方一其多市とやらを索當てららん時の必ず報知致すべし爾りながら百兩と云ふ大金と盗み取られて無困却あるべし是れに聊くあれど旅費の補ふも致さるべしと高の何程うまら紙へ包んで渡す寸志の金徳平の押戴き「難波話もしお聞きせし簡様な御思みをうけましての濟みませねど途方は暮れし今の身のうへ一目信州へ歸りますまで此の金を頂戴致しまする然して多雨公棟の御名前の何よと仰せられまするの情願御聞かせ下さりませと道へは鞍國打笑ひ「是程の事を思を被るに及ばんや然し不正の金子おどし思はるよも氣の毒あれば姓名の名乗やス拙者の勢州藤堂家の臣村山平太郎義國と申あり「まさ小弟の弟にて三州學母内藤の家臣岩槻傳十郎義久と申あり吾儕の是より關東筋を修行させば縁あらば再面會をす事もあらん隨分此うへ共お道中注意せられよ娘お父を勧るべし去ば〜と兄弟の驛ある方へ送り行ハ見ぬあがらよ德平の後伏拜〜お雪を力お信州路投て歸り行しい心の裡を推量るさへ哀れあり恚而義國兄弟の吾助の弟眞助の住居を訪ね身を寄せて德平お聞き取りし該多市と云ふ按摩の踪蹟を搜索せんと熊谷驛お入りて甲處う乙處うと廣くもあらぬ驛内を眞助と云へる人の住居の何處と尋ねても同

ト名のありても其人はあらずして更ふ手懸りとておければ只得今宵の旅店に就き翌日あ至りて訪ね見んと兄弟の同驛を復折のら大勢の農民が各自に鋤鍬竹鎗の類を携へ中も一個前より立し提灯持つる下男体の者や兄弟の姿を一目見るよりソリヤこそ此處に盗賊をれり縛れくと喚き立つれば合點ありと大勢が立籠らんといふも了得兩個の帯刀の威お怖れしか寄りつゝのす只喧々と呼ばゝるのみ當時義國兄弟の此体爲に不審と思へば身構さあから聲をかけ「如何ある仔細う知らされど吾々兩個を取り巻いて盗賊呼ばり心待す一体其方何者あるりと云はせも果す前へ進みし一個の男の眼を瞞し「ヤア盗賊さけくしいとやら其方何の今宵當驛の乾盆石原餅三郎殿の宅へ押入り娘公のお菊どのを威して金を盗み逃げ去りし兩個の賊は相違ないやア尋常は繩にうゝるか爾等も吾等が此竹鎗で田樂申よまでやるぞと口よの立派よ云ひあから底氣味悪る氣に後じさり仔細を聴くより傳十郎の憤然として刀を反らち「ヤア云はして置けば奇怪なる其一言吾々こそ何の何某と苟くも一藩の祿を食む者共おれ然るは故なく盗賊の汚名を被らすのみならず繩よりれの田樂申のと無禮過言の芋堀共此うへに其方何の手を下さずとも今某が片ッ端より撫で切り

よして呉れんすと立向はんとする處を義國の押禁め「コリヤ待て義久焦く場所あらす虫よ齊一者們と相人よするの無益の事と云ひつゝ前なる男よ向ひ「今聞けば石原とやらへ今夜盗賊入つゝるうへ金子を奪ひ立去りし其盗賊が兩人よて然も吾儕が此姿よ似るよりして斯の如く追ッ取り巻くれし者あるべし時よとつての吾々が災難縱令今此處よ分疎するとも承知をすまト疑感うけし上うらの何處まで赴きて盗賊あらぬ辨解せん其方何の望む如く引致行も然るべし爾りあがら吾々の浪人あらぬ武士おれば未だ黒白判然せざるは決して繩よの罹るまト其れとも強て繩をうけ引致行うんとするならば是非お及ばず憫然あがら死人の山を築くべし之れぞ眞個の武士が尋常ある覺期あり是れよても未だ疑ふやと尖さ一言聴くよりも百姓們の誰わつて返答する者なりしが中よも一個進み出で成るはど立派お其辭の了得よか武士衆と感伏の致したや武士だより盗賊をせぬと相場の極つゝ者でもあし今夜當驛お兩個連れの盗賊押入り金を奪ひし折も折とて兩人連よて此處邊をうろく爲てお出でだのら疑感れるも是非おない左右石原の宅まで來て其分疎を致されよと道ふをも待たぬ短氣の義久兄義國が袖を捉へ「ヤし兄上身お曇りあさ事あるふ此者們よ引致られ假おも

盜賊の冤罪の心よからぬ事よて侍り設此奴等の疑感解けずハ盜され主の石原とやらを此へ招ねいて言ひ聞けんと口惜涙の弟が体を義國の察しあから「其遺體の吾れとて同じ爾りあがら斯大勢の居る中めて兩個が實事を明りすハ無益又無益ある耳ならず設や多イヤサ他人は何も知らさぬ性名只何事も某が胸みまのせて恥辱を恐べと云はれて寤おもと義久の黙念として差俯向動靜を知らねハ百性の「如何やら段々喚い体々見えて來る些とも早ふ乾盆の宅へせ云ふハ一同喚き立てサア」行けと前後左右を取り巻るがら追つ立てる百件們又頼着せず無念を恐び兄弟の打連れ立つて行はると雖も同邸内の「高堀造り黒門の掛も最と嚴重ある家居の内ハ連れ込みて前ある男ハ濁聲掉り立て「乾盆お在の今夜の盜賊兩個とも引致て來ましうら吟味をあたいと掌功面ハ鼻齧りして饒舌立つれば斯と聞さつて奥の室より一刀腰に悠々と立出でしハ當家の主固石原銀三郎とて熊谷近郡又聞えたる俠客あるが他の賭徒杯と違ひ上を敬し下を恤み専ら慈悲を施して毫も邪曲あるものから人皆石原の乾盆くも服従して家富榮の慕し居るが必竟茲ハ義國兄弟の汚名ハ解くるり解けざるの亦是よりして如何なる譚やある开ハ姑く次節ハ解分くべし

○人松島遊女の應接
附高樓幼子の復讐

月窓一夕譚

彩霞園柳香稿

第五節

登時主固銀三郎の兄弟の者を暇遣りて道々様「宵ハ吾儕ハ所用ありて近村まで趣さし其不在の女の外の野面稼ぎの役立す者計りも其れを見込んで忍び入り威しよかけて金銀を奪ひ去りしハ汝等兩個り未だ此邊を彷徨て押へられたハ運の盡然し盗みし品々を体よく戻さハ命丈けの助て境を撥ふべし設強情をいふあらハ充分折監あしたる上よて代官所へ召連訴へん性根を定めて返答せよと威高なる景狀ハ兄弟の辞を更め「先刻途中で此處ハ居る下郎輩が盜賊喚り聽棄てあらずと思ひしかど相人ハ足らぬ者輩へ彼是論ハ好まざるゆゑ乾盆と目那どのす汝ハ面會して辨解あさんと恥辱を忍び此鼠輩と俱偲ハ同道致し來りしが今汝の道ふ所を听けハ吾々兩個を盜賊と飽まで凌辱あすと思へり抑も今宵忍び入りし其盜賊を吾々との奈何ある証據ある事ハや子細も糺さず輕卒ハ盜賊喚はり致す時ハ反て後に悔ひあらむ吾々の今宵宿留よて眞助と道へる者を索る爲め夜陰ハ其處此處徘徊せしなり

且盜賊の証據を示せと勸する色なき兄弟の容子を熟々見て取る石原何か尋思の体ありしが
器々喋々百姓輩を皆斥けて庭より下り「只今語れし當宿にて真助と道へる者を索らるゝの親
族の人の但し亦朋友の人ふてある事其分疏さへ判然せば此方の疑惑も散るなりと心あり
氣の一言お藏まへ反て悪りるべしと義國の打黙頭「尋とあらばや聞のさむ其真助より吾々
兩人未だ面會致さねど其者の兄吾助と云へるの吾家に仕し臣僕あるも多疾ふ名を識り當地
お來たらば訪問のんと存せしかりと語る辞も乾らぬうち屏所を出づる一個の下男が鐵三郎
も打對ひ「且那樣此はと兄よりや越したるは二方の設此お人でのは座りませいか如何よ
も吾も然思ふゆゑ他の下男を斥けしなりと云ひつゝ兩箇が傍より立寄り「甚だ怒卒なる事
おがら貴官門の三州より當地へ來ませし人あるりと問ふお不審と兄弟の顔看合せて躊躇体
を件の下男が其れと察し「失禮ながら貴君方の岩槻様の御子息あらんと道にお越し駭く兄
弟送ふ刀の反打つて「吾々兩箇を盜賊ありと悪名附せて誑き來たり今岩槻の子息なと
久「真を知つたる其方等より再くと離りお頼まれしよな最う此うへの了前ならず兄上御用意
國「心得たと身構あせは鐵三郎の須臾と禁め身と謙遜り「其は不審なは有理貴官門か尋思の

其真助こそ是をる下男の事お候ふありお意易りれは兄弟身の上の有枝有葉の吾助の
許より告越したれば具承知致しをれり今宵貴君を盜賊なりと悪名附せて喚び寄せしは吾
等が豫ての合調あり只計りよては合點あるまじ且く拙者か陳述所を聞き取り玉へと道ひ
おがら兄弟を一室に請じ那の真助を後坐させ兩個は向ひ道へる様「先頃當地の者が澁州
路へ罷越したる歸途にて測らず真助の兄乃ち貴君の臣僕吾助も出逢ひ同國人ゆゑ弟の許へ
用事おさやと問ひたるに章認めて差送りし吾と弟へ委贖の文の貴君們兄弟が復讐の爲め
涉出立相ありしゆゑ設訪訪ある時の吾に代つて涉世話をと呉々や越したるよぞ其後此真
助とや合せ設兩個連の武士おて當驛お待後人おとあらば斯々して憤怒を起さしめ吾家へ伴
ひ來たるべしと縁々吩咐置たるが今夜驛にて兩人の浪人体は逢ふたりと告たる者のありし
を以て直さま大勢の者を遣し故と盜賊物取と最と失禮ある中事も大事を抱へし涉身おて輕
卒なる涉舉動あるりと竊はは心を懸りしよ了得の岩槻の若旦那無念を忍び來玉ひつる其涉
覺悟も感佩せり爾れども未だ虛實知れねは篤と容子を索るうち測らず先刻真助を索る者と
仰せゆりしよ越し其れと推察して再こそ斯ハやすされ此上の涉惡念おく吾家お涉滞留遊ば

されよ吾們も前年江戸表は於て浮親父様も浮對面やせしが不慮の浮最期ありし事承せし
つて駭き入つたり爾りながら瀨多門とやらを討取り玉ふの瞬間うちあらひ而て亦當地へ浮
越ありしハ浮心當りあてもある事にや語せ玉へと懇切ある辞の尾ハ真助ハ其場へ出で、頭
を下げ「親旦那様ハ江戸表にて一度浮目通を致せしりと和子様方ハ今夕始て兄君助メ
ガ從來ハ浮恩の隙々中送り毎も其度母俱侶浮國の方を拜ひばうり母も昨年没去ました其
節までも岩椀様の浮思を努々忘るゝかと音信の度ハ兄へ告よと遺言を致し置し位其れハ先
頃兄より報知又思ひかけなき旦那様ハ人手ハ懼り云々と認めありしハ吃驚して早速此旦那
へ浮頼み申し切て當地へ浮出の節ハ力ハあらずとサ思つた所ガ私ハ聊の水香白性あれば
土地で名高い石原の此親盆を後精万事浮協議下さりませ 私風情ハ浮役ハ立ねば亦相應を
浮用もあらハ浮使ひあされて下さりませと田舎律義を忠僕ハ涙ハ顯す己ハ名の眞の心どわ
り難き兄弟ハ思ひがけねハ再ハ然らうと辞なく亦願回す父ハ横死須臾ハ無念の嘆き又暮れ
しが稍く小顔を仰げ「何事も浮存あるらへハ今更多辯を費さねと去る頃三州を出立致せし
後東海道より甲府入り敵の行方と索ながら不圖出立の御吾助より熊谷驛ハ真助と云ふ弟

をれりと告たれど原來人ハ恐るまじと決心おしたる事あれば其時詳細耳に注めぬ名ハ判
然と覺ゆる居しゆる左右是れを訪れんと今日當驛へ投籠り驛盡頭ある茶店にて憩し折うら測
らすもと那の徳平父子ハ出逢ひしより多市と云へる按摩ガ那等ガ盤纏ハ奪ひたる話を聞き
其人相の仇多門ハ似たりしゆる何方へ行と告しぞと尋しハ本庄まで赴き夫れより江戸表へ
出る云々との事あれば設や心懸りあてもあらざるう其れ等を索ね委屬せんと真助を訪よ參
りしのを更ハ知つたる人ハ逢はねハ今ハ當地ハ居らぬ事よと諦め明日ハ江戸表へ志投の所
存ふてありしハ不測今夜の災難ハ貴郎兼ふも兼てより吾々兄弟を索らるゝ深き所存の故を
りしり寔おく不思議の對面なりしと歡ぶ中も義久ハ先刻百性們ガ雜言過言惡ツクき奴
と存せしゆる片端より打て棄んと思ひしを兄上ガ浮禁めありしハ今よして思ひ出だせば
君子の所謂短慮功を成さず向後の輕卒の舉動ハ深く僅むべしと弟ガ辞ハ義國も出立前も
やせし如く仇ハ名ハ負ふ劍客あり殊ハ邪智ハ長せし奴設出會をあすとも奈何ある權
謀ある哉も知れず吾命令を等たすして必ず手差ハ無用あるぞと諭すを傍ハ聞居る兩個ハ其
多市とやらんいふ按摩ハ搜索ハ最と易し明日よもあれ乾盆の者ハ吩咐驛内よとる取締の者

お問合さば然る按摩が當驛よをるう亦い何處よりとこの事近國をらば早速分るべし且々
 今宵の路次の劬を憩め玉へと勅りて應て娘お菊を喚び出たし乾淨房へ案内させ當夜よりし
 て鉄三郎の兩個を吾家お止め置きぬ爾れは兄弟の石原方よ身を寄せ多市の行方を搜索せし
 お那の按摩取締より鉄三郎方への通知に關八州の勿論信濃路も然る按摩とて候いねば
 恐くは街盜の輩が偽名せしものよて候いむとありしゆゑ石原の此趣きを兄弟に語りしよ再
 の越よ多市こそ怨敵多門お相違ひあらば此うへに江戸表へ赴き穿鑿すべしと翌日の出立せ
 んと云ひし當夜より不圖傳十郎義久の發熱して苦痛を覺え倒枕の揚るべくもあらざるゆ
 ゑ義國の駭き大方あらず鉄三郎父子を始め眞助も醫者よ藥師と介抱に聊の怠りなきとい雖
 も所詮急に本腹あるまじと醫者の診察されば傳十郎の心を痛め兄弟一緒お國を出で俱お
 天を戴かずと誓ひたる多門の首をわけざるうちお設弟が身に不慮ありて母の嘆きを想ひ
 やられ殊に吾も一個の弟一日も早く全癒させんと神お祈り佛よ念ト専ら治療を盡せども
 更お主治もなきものより義國の益す心を痛めをりしが同じ思ひの鉄三郎も義國の心を察し
 或日醫者よ就て義久の病氣全癒の有無を問ひ合せしお只心長く養生なしお全癒せずと云



ふ事のあるまじし解りながら其養生も當地ありて悪のらむ何方へ土地を轉すること宜
うらめ決して死病ふてゐるまじきぞと道入れて稍く安堵なし此趣きを義國へも語り然ら
ば至急に轉地をさせやさんと鐵三郎の眞助も命じ村内の乾兒大勢を喚び寄せ義久を釣臺よ
臥さしめ之れを乾兒も昇らせ上州伊香保の温泉場お旅店を開く樹屋藤兵衛の鐵三郎の家よ
備れし者おればと同人方を出養生場とあし義國兄弟を送り遣りぬ亦介抱人おの眞助と娘お
菊の兩個を添へ置き何不自由なく治療をさせしか土地の轉りと藥の主治り追々快癒も赴く
の容子おれば義國の勿論お菊眞助も最と打歡び此事を鐵三郎の計へも告げ其全癒を待ちお
たり日一日薬取りも行たる眞助が遽だしく立歸りて義國お道へる様只今驛盡頭まで承まは
りし旅人の噂お此節江口より前橋の町も來たれる大寶院と云へる修驗者元相州の出生
なれど幼年より修行なし如何なる病氣と雖も此者の加持祈禱およれば全癒せずといふ事お
し現お吾等の母あどの病氣の其修驗者の加治おより全癒きたりと物語をれり若旦那の修病
氣も其修驗者お祈禱の事をお頼みあされてい奈何ならんと辞を央諾さるわへ平太郎の膝
立直し「何んとす相州出生の者にて而も修驗者大寶院とすよす然うして年齢容貌の

如何ある者う聞かざりしや「ハイ唯其れ耳を聞いたる儘疾く修報知しさうと立歸りしゆゑ
年齢までの「聞き漏らせしこと遺憾おれ爾りながら相州生の者とわれは聞拾ちらぬ多門と
同國と道入れて眞助兩掌を打ち「成ほど常々お噂の仇も相州生れにて修驗者おのどあるう
らの設や其大寶院が多門とやらでゐるまいうエ、其いふ事から年齢人相詳細聞いて歸ら
うもの其首へ少しも氣が注ぐす唯義久様のお病氣を修全癒させませうと思ひ詰たまゝ其
様お處まで届りあんだが所謂下主の知恵の後うらと道へば義國頭を掉り「何おもせよ斯承
まゐるうへのらひ拙者の是より前橋へ赴き篤と實否を糺すべし汝等の弟の介抱宜ろしく願
參らするありと頼み置き義久が枕邊近くへ進み寄り「今聞く通りの子細ゆる小可彼地へ赴
きて設も多門と判然お領主へ願ひて仇讎の手續をあし渠を逃さぬやうあし早速報知よ
及ぶべければ其時こそ途中まで縱令死すとも罷來よ夫れまでの輕卒お進退おして悪うり
なん努々心得置べしと兄の辞お義久の枕を擡げ道へる様「旅に病たる不甲斐なサ兄上のお
力おのあらずして斯修心勞を懸け奉つる思へば眞加恐し何卒其れが多門よてあらば拙者
も是非は「太刀の「道ふおや及ぶ吉報を相待をれよと身準備なし立上りしが何とやら弟お

心残されて願省れバ義久も兄の顔をバ打諦視互ひみボロリと一平長き別れになるぞとの知
らず知られぬ義國が思ひ切つてぞ立出けり門送りして立歸るお菊の義久の傍に寄り兄上様
うらな便のある頃までよの病氣も追々全癒で座りませう必ずお案じ遊ばすかと心を
慰めぬりぬ意は遠くて近きと云ひし清女が言の宜なる哉始めお菊の兄弟が再家来たりし
其頃より不圖義久を眷戀め人なき折に言寄りしお義久も大事を抱えし身の上なればと一旦
之れを拒絶し切なる思ひを掻口説うれ了得よ岩木みあらざるゆゑ竟お人目の調略えて早
晩怪しき中とありしを知る者更にありし折うら早出立と定まりしにぞお菊と獨涙に容
れしが大事を首尾能遂げたる後に父公お乞ひて妻よせんどの辭を力よ惜るゝ別れを他よ
思ひ居てしも遽に發せし病氣の爲め不圖伊香保へ出養生の其介抱ふと眞助と俱よ日暮義久
が傍を離れず居たりしが去る頃よりして月の徑りよ淹はり酸物好みの發たるゝ正しく懐胎
せしならんと心の裡に駭きて義久よ此事を告んとい思へども義國あり眞助ありの目よ堰
れ斯々と言寄る術もあがりし折を不測仇を穿鑿の爲め平太郎の前橋お赴き眞助の醫師の
許へ遣せしゆゑ好機會と義久が枕の下に立寄りて爾さだは侈心惡き侈身あるを筒様の事

とも聞こえわぐるゝ妾も本意お侍らね云いで濟せん事おしわらねバ潜よ上るありと常
さらぬ身とありたりし容子を告げて顔蔽へバ義久も打驚き和女と奇き縁を結びし夫れさへ
兄公へ濟まざりしと深く後悔おしたるゝ懐妊とまでおられしとい以ての外的事ありし知ら
るゝ通り堅固き兄ゆゑ設も其れと聞のバ如何ある立腹おらんも知れず只あつて胤を胎せし
の荷且さらぬ事なりうし此うへの和女一旦熊谷お歸り何方よもあれ知己の方よて分曉よあ
るまで潜みおられよ吾の少しの快癒を待ちて兄公へ謝罪をおしたる後兄義國お實を告げ妻
よ迎ふる手續きなさむ大事を抱えし身てありながら仇し契を結びしハ吾おがら過つたり
と嘆息おせし義久が辭よお菊の返答さへ泣より外的事をおき折しも次の襖を開き「イヤ其
侈心配よハ及びませぬと立出る下男眞助が姿を著るより兩個の打駭きて赤面おし「再ハ只
今の話をバ「ハイ残らず次よ承まつりましたが失禮ながら若旦那もお菊さんも未だ生お
もの豫て旦那三郎様のお兩個の間を能く存存ゆゑ當伊香保へ出養生と極つた其折よ私
をお招きおされ此度義久様の介抱よお菊と其方を屬てやるうら万事よ氣を注げ侈看護せよ
亦奈何やら義久様とお菊と出来た様おられバ病氣の障りよさらぬ様其首ハ年役よ頼むぞと粹

な辭の汚注意交た問から懐妊するの世間不定まつてゐる事ゆるか兩個の中を知つて汚座る
 旦那様へ潜したての反て悪う汚座りませううら懷孕ふかりましたと打わけて仰やる方々
 が早いハテ貴卿の口うら云のれさせねバ幸ひ昨今の義久様は汚快い汚容子ゆる私の一
 り旦那様へ汚協議を参りませう彼是するうち義國様が汚歸りふあつての穢六くしい四五日
 の所お菊さまは介抱をお頼み申す何れも其様な汚心配の及びませぬ若いうちよハ誰し
 もわりうち大丈夫と思召させと律義一遍主思ひも氣も輕口の眞助の身準備あして其日
 谷投て急ぎ行斯てお菊の眞助の語を聞いて稍くは胸浴つけど義久の鉄三郎が知つたるうと
 思へハ慙愧お堪られねど亦今更に是非おければ只速くは全癒して謝罪するより外はあらト
 と頼りお胸を痛めし故うまたも發熱熾よして最と苦痛を覺おしお菊の早速醫師許赴き
 容体を告て調劑の藥を乞ひて立歸り煎じあげつゝ服させしよ少しの病も治まりしや何分咽
 喉の乾く爲め幾杯とさく水を飲みしに怪しや翌日の午下りお菊お吩咐ませたる茶碗の水
 を一口飲みしに忽ち五臟裂るゝぱうり虚空を掴み煩悶おたる苦痛の抑も如何なる理由く
 繪様とともお次節に述べなん

明治十八年二月四日 御届 定価四十錢

編輯人

出版人

賣捌人

編輯人

出版人

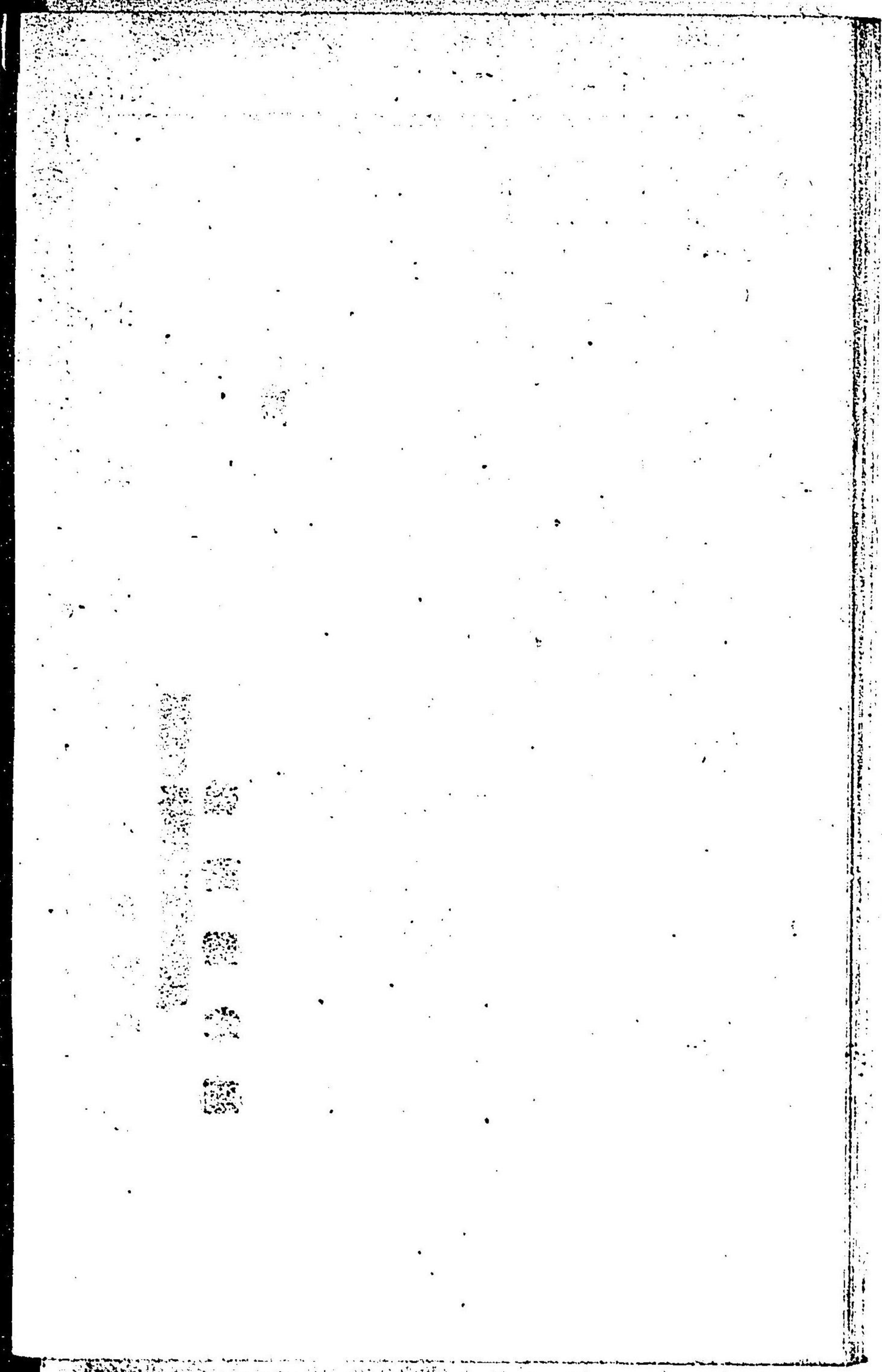
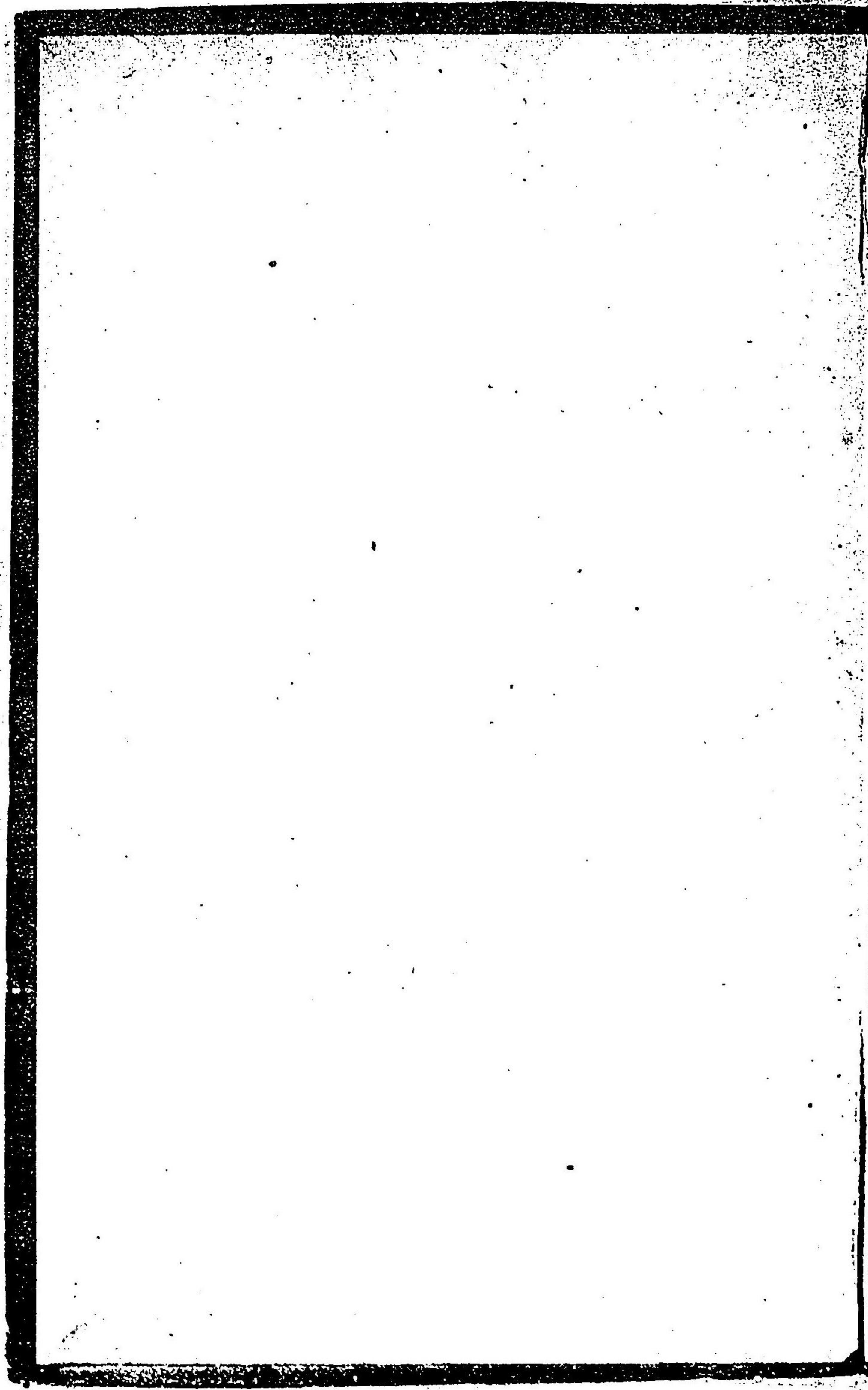
賣捌人

京橋區弓町十二番地

丸山幸次郎

大賣捌
 南傳馬町一丁目
 同 通四丁目
 同 芝三島町
 同 兩國若松町
 同 京橋南紺屋町
 同 横山町二丁目
 春陽吉藏堂
 丸屋鐵次郎
 金山櫻支店
 山田屋
 上田屋榮次郎
 榑原友吉
 深川屋長助
 井上勝五郎
 鶴聲社

元大坂町
 人形町通
 室町三丁目
 人形町通松島町
 淺草茅町
 八丁堀仲町
 八丁堀仲町
 小網町二丁目
 南茅場山
 濱町二丁目
 横山町
 法木徳兵衛
 具足屋熊二郎
 滑屋積之助
 伊勢屋庄之助
 森本順三郎
 小野口藤太郎
 大野和屋
 永昌堂
 三浦屋金二郎
 高崎文助
 辻岡助



東 京 圖 書 館

和書門

類

一函

二架

一三六號

一冊